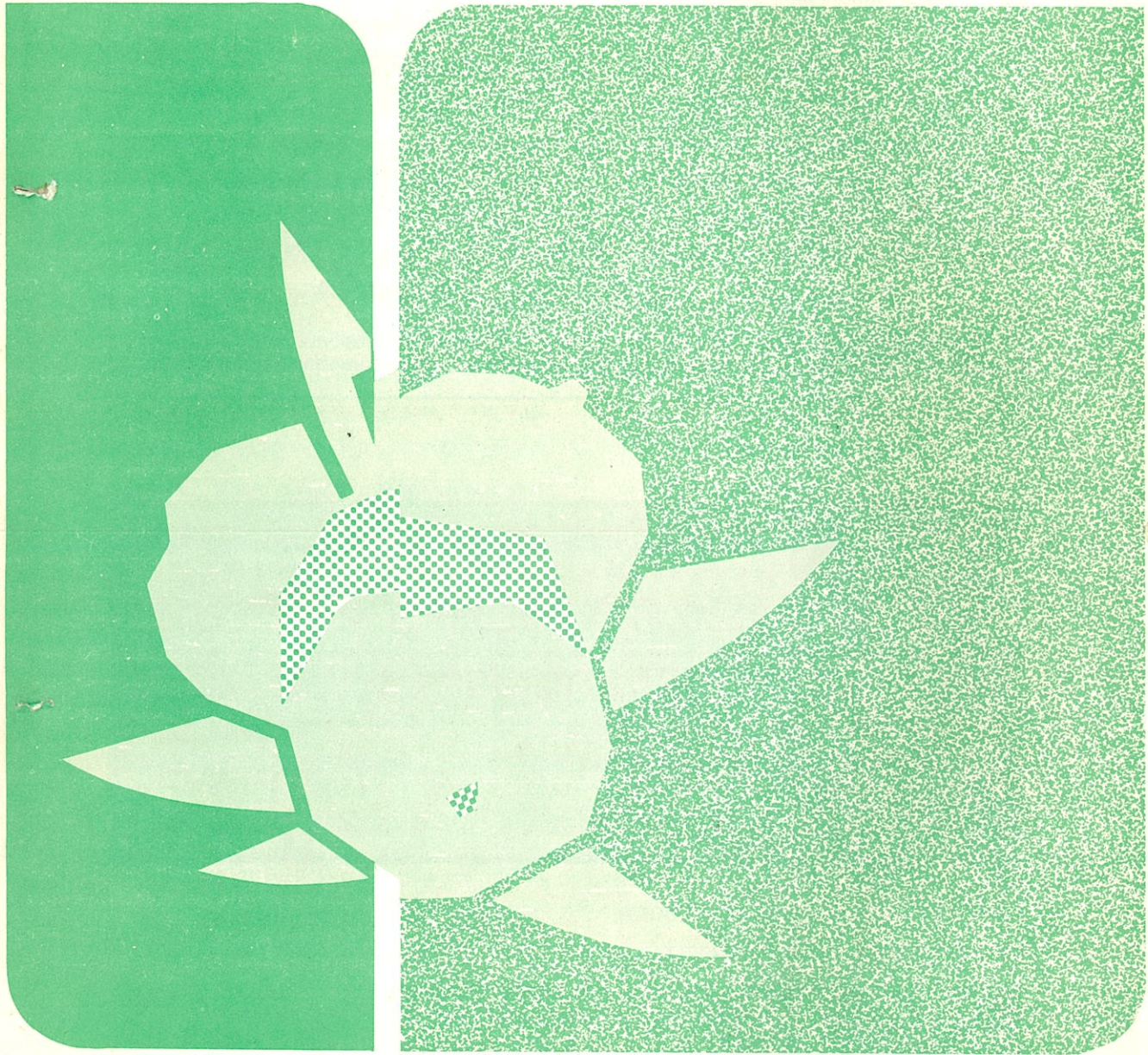


植調

第8卷第5号



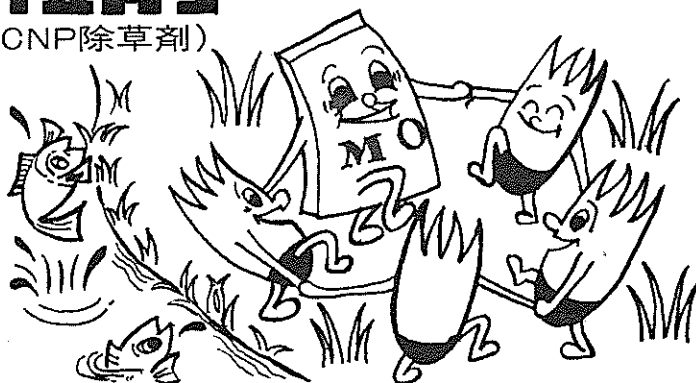
財団法人 日本植物調節剤研究協会編

安全でよく効く!

——水田除草剤——

MO粒剤

(CNP除草剤)



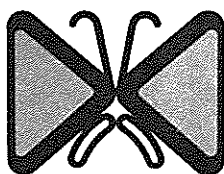
MO普及会

取扱会社 クミアイ化学、三共、北興化学、八洲化学、日本農薬、サンケイ化学
事務局 東京都千代田区霞が関3-2-5(霞が関ビル)三井東圧化学株式会社内

頼れる水田除草剤

田植の前後に

エックスゴーニ粒剤



- 殺草力が強く、そのうえ抑草期間が長いので普通移植栽培はもちろんのこと、稚苗移植栽培にも最適です。
- 処理適期の幅が広く、ノビエ・カヤツリグサ・一年生の広葉雑草からマツバイまで高い効果を発揮します。
- 人畜・魚貝類に対する毒性も低く、稲におよぼす影響もほとんどないので安心して使えます。

●エックスゴーニ協議会



日本農薬株式会社

●103 東京都中央区日本橋1-2-5



石原産業株式会社

●550-91 大阪市西区江戸堀上通1-11-11

植物の生育抑制

果樹試験場も筑波移転機関の一つとして各種の作業に追われている現状であるが、頭の痛いことの一つに苗木育成のタイミングの問題がある。たまたま旧園試から野菜部門が分離したため、その跡地ほ場を苗木育成用にあてているものの、移転の時期が遅れているので、その間に当然苗木はどんどん生長する。落葉果樹は一般に常緑果樹に比べて生長が早いからよけい始末が悪い。大きくなっても移植は不可能ではないが、輸送を含む移植の経費と手間が著しく増大する。したがって、遅れ方によっては始めからやり直しということにもなりかねない。

一方、話しは違ひけれども、現場においては育種が重要な研究業務となっており、そのためには国内の品種はもちろんのこと、年々増加する外国導入品種についても、品種の保存が実質的に義務づけられている。交配実生は適度に生長して早くから結実してほしいが、ただ保存しておくだけでよい品種はあまり大きくなってほしくないし、また著しく多量に結実しないことが望ましい。かといって摘果を強くすれば枝の生長がおう盛となり、せん定を強くすればまた強い枝が発生する。

はなはだ勝手な言い分ではあるが、あくまでも枯れないことを前提として、じつと大きくならないでほしいということである。化学調節により、一時的に、あるいはかなりの期間にわたって、適当な時点で生長をほとんど停止して休息していただくというわけにはいかないものだろうか。

(農林省果樹試験場栽培部長 千葉 勉)

目 次

(第8巻第5号)

新年にあたって 2

＜財団法人日本植物調節剤研究協会＞
会 長 戸 荊 義 次

年 頭 所 感 3

＜農薬工業会会長 吉 田 豊＞

昭和49年度水稻作関係除草剤試験

成績概要

1. 供試除草剤の動向 4

2. 試験結果の概要 5

第1表 区分別委託除草剤数 5

第2表 昭和49年度水稻作関係
除草剤実用化判定表 8

第3表 昭和49年度水稻作関係
実用化除草剤使用基準一
覧表 10

＜財団法人日本植物調節剤研究協会＞

昭和49年度畑作関係除草剤試験

成績概要

I. 供試薬剤 33

II. 対象作物・薬剤別判定結果 ... 34

III. 実用化判定薬剤使用基準 35

＜財団法人日本植物調節剤研究協会＞

昭和49年度水稻・畑作関係生育

調節剤試験成績概要 38

＜財団法人日本植物調節剤研究協会＞

植調協会だより 41

新 年 に あ た っ て

財団法人 日本植物調節剤研究協会会長 戸町義次

植調研究所が新しく竣工した。鴻巣の研究所の移転であるが、面目は一新した。自然科学のなかでも生物の研究は、実物を見ることによって理解が早い。除草剤や生育調節剤に対する植物反応を知るには、実地に経験するに限るとの見地から、本協会設立後8年目に鴻巣に研究所を開設したのは卓見であった。隣接の農事試験場の専門家の指導や協力を得られた利点もあって、除草剤や生育調節剤の開発に貢献した程度は計りしれぬものがあり、思えば功多き施設であった。

除草剤や生育調節剤の発展が目ざましくなるにつれて、研究所拡充の要望が高まり、これに応えて牛久移転となったのである。施設そのものからいえば鴻巣の旧研究所は貧素であり、牛久の新研究所は豊かである。研究が施設に比例するなら、新研究所は従来に数倍する能率がある筈である。鴻巣の旧研究所は、施設の割に良い成果を収めたと思う。それは施設の貧弱なものを研究者の努力で補う意気込みがあったからである。またこのような条件の下に働く研究者に対する外部の思いやりのあったのも事実と思う。

鴻巣の旧研究所時代の心構えをデラックスな新研究所に持ち込むなら、その成果は期して俟つものがあると信ずる。ところが人間はお互いに勤勉と怠惰、愛と憎、祝福と嫉妬を同時にもち、悲しい本性の所有者である。しかも逆境において勤勉・愛・祝福が、順境において怠惰・

憎・嫉妬が生じ易いという傾向のあるのも、しばしば経験するところである。かゝる人間の弱点を認識し、その弱点を労わり合ってこそ、誠意が伝わり、信頼が生まれ、研究成果が上がり、研究所や協会の発展が可能となるのである。

以上は主として精神面のことであるが、もう一つ大切なことが経済面にある。それは施設が大きく立派になると維持経費が加速度的にかさむということである。建物の大きさに比例して維持費の増えるのは当然であるが、研究能率をあげるに必要な諸装置はすべて光熱水料を食うことを認識し、その使用を合理的に心がけるか否かによって経費に大きな差を生ずることを知ってほしいと思う。さらに注意すべきは暖房や照明が便利になると、その便利さに慣れてとかく必要以上の冗費に流れ易いことである。

新研究所の建設は、われわれ職員のみで努力によってできたのではない。関係官民の協力があったからこそである。これら官民関係者はひとしく研究所の成果を待望しているのである。これに応えるためには資金を有益に使用して、研究一途に能率をあげねばならぬ。

今、協会は物価と人件費の高騰に苦しい事情にあるが、研究の成果さえ出ればこんな苦境は一気に吹き飛んでしまう。謙虚に誠実に試験研究を進め、農民を幸福にするを目的とする農学の一翼を荷って、稔り多き年にしたいと願う。

年 頭 所 感

農薬工業会会長 吉 田 豊

あけましておめでとうございます。

昨冬は除草剤試験研究25周年、(財)日本植物調節剤研究協会設立10周年、研究所竣工の記念行事がとり行なわれましたことを重ねてお慶び申し上げます。

振りかえってみますと、昨年は大変な年でありました。一昨年の石油危機をうけて、石油緊急対策として電気使用制限令、石油需給適正化法の発動、3月には国民生活安定緊急対策の一環として基礎物資、生活関連物資などの価格抑制策が実施され、農薬は登録件数13,000を超える各種の薬剤が一本化されて基礎物資53品目の中の一つとして価格が凍結されました。

こうした激動の中で、農薬製造業に対しては電力も優先措置が講ぜられたのでありますが、農薬生産に不可欠な関連資材物資に対しては、必要措置がとられなかったため、関係官庁に月々の所要電力量の増配を陳情しました。幸い一昨年度と同量位は供給可能の見通しがつきました頃、いもち病多発に対応するための薬剤確保の追い討ちがかかり、業界必死の努力で、地域によっては若干の喰い違いもありましたが、ほぼ防除の目的が達せられましたことはご同慶に

たえません。この結果は一昨年の供給数量58万トンに対し昨年は約70万トンになりました。

しかし、新しい年を迎えることになって、昨年安定供給の責を果し得た安緒の気持ちの中で、農家で実際に使用された量はどの位だったか？統計数字がわからないまま大きな問題を抱えております。

この数年来、私どもは農薬の安全性の問題で苛酷なまでに社会的批判と要請をうけたものでありますが、業界あげて懸命な研究努力によって、これらに対応できる体制確立に専心しております。しかし、今年度当面する問題としては、上記した物量対策の他に、予想される公共料金始め諸物価の高騰、5月から実施される資本の100%自由化、本年国会で審議される物質特許制度への移行等、企業体質の根本的改善を迫られております。

一方食糧問題が地球上の緊急課題としてとりあげられておりますとき、私どもは植物保護として農薬に課せられた使命を改めて認識し、研鑽を重ねたい所存でありますので、各位の変らぬご指導ご協力をお願いして新年のご挨拶いたします。

Weed List in Asian-Pacific Area 実費頒布(900)

お申し込みは 植調編集印刷事務所へ
(東京都港区芝愛宕町1-3 全国農村教育協会内)

昭和49年度水稻作関係 除草剤試験成績概要

財団法人 日本植物調節剤研究協会

昭和49年度水稻作関係除草剤の試験成績検討会は昭和49年12月11日より13日までの3日間にわたって、東京農林年金会館において開催された。ここにその結果の概要について紹介する。

1. 供試除草剤の動向

昭和47年度から本年度まで3年間の委託除草剤は第1表の通りである。本年度供試されたのは合計145薬剤で、供試合計剤数でみるかぎりではこの3年間大差ないが、内容的には昭和48年度より若干傾向が変わり、機械移植栽培の増加に伴ない、稚苗移植栽培を対象とした除草剤の委託が増加し、本年度は成苗移植栽培対象の58薬剤を超えた69薬剤が検討された。

つぎに、研究課題ごとにとみると次のようである。この2～3年問題とされている多年生雑草はその発生面積をふやし、昭和47年度の発生面積110万haから本年度はこれの1.5倍から2.0倍に達しているものと推定され、有効な除草剤の開発がますます急がれる段階である。本年度もBAS-3510関係の除草剤は成苗移植で19薬剤、稚苗移植対象として13薬剤、乾田直播用として2薬剤が検討された。また大多数の除草剤が、多年生草種への拡大をも含めて試験検討された。

土壌混和処理は最近の機械移植栽培法の増加ともあわせ、省力性や効力の持続性、安定性などから有効な処理法として注目されているが、

本年度は成苗移植栽培で8薬剤、稚苗移植栽培で10薬剤が委託され、過年度に引き続き検討された。また、ジフェニールエーテル系で作用力の極めて強い新しい薬剤が1剤委託され、また処理法など新しい方向が生まれそうである。

茎葉兼土壌処理はモリネートSM粒剤が昭和47年度はじめての3L(葉期)時処理剤として実用化判定を得たが、前年度に引き続きノビエ3.5L時までの有効性についての検討と多年生雑草との同時防除の可能性について試験検討された。このほか、モリネートKM粒剤、B-3015・S・MCPB粒剤なども有効薬期拡大をねらって試験委託された。

パイプダスター利用による除草剤の省力かつ少量均一散布は今後の散布法の1つとして注目されるところであるが、NIP、X-52など合計9薬剤について省力性と散布の均一性による2kg/10a散布の適用性について検討された。

作用特性試験は成苗移植栽培対象9薬剤、稚苗移植栽培対象20薬剤について早期栽培条件下と普通期栽培条件下でそれぞれ試験を実施し、さらに、作用性および変動要因試験は14薬剤、沖縄の石垣試験地では61薬剤について試験を実施した。また、第一次適用性試験では成苗移植対象13薬剤、稚苗移植対象として18薬剤について試験し、これについては9月17日に中央検討会を開催し、判定を行なった。これに

については植調第8巻第4号において報告済みである。

2. 試験結果の概要

本年度供試薬剤の中で実用化可能と判定されたものは、成苗移植栽培を対象として52薬剤、稚苗移植栽培を対象としては60薬剤、湛水直播対象3薬剤、乾田直播対象2薬剤、畦畔雑草対象2薬剤、耕起前1薬剤、休耕田・非農耕地対象が1薬剤の合計120薬剤で、これは供試薬剤中の82%に該当する。このように多くの除

草剤が実用化可能と判断されたことは、供試された多くのものが、既に有効性が認められた薬剤同志の混合剤であることにもよるが、1つには、作用特性試験、変動要因試験、適1試験、さらに本年度からの沖縄石垣島における試験等を通じて薬剤の作用性がより把握し易くなっていることも大きな理由と思われる。第二次適用性試験の判定結果は第2表、実用化が認められた除草剤の使用基準は第3表の通りである。なお、沖縄石垣島試験地の試験結果は別に報告した。

第1表 区分別委託除草剤数（昭和47～49年度）

区 分	年 度	昭和47年度			区 分	年 度	昭和47年度		
		昭和47年度	昭和48年度	昭和49年度			昭和47年度	昭和48年度	昭和49年度
成 苗 移 植	土壌混和	9	7	8	湛 水 直 播		10	4	3
	移植前後	8	14	4	乾 田 直 播		11	4	6
	土 壌	20	9	9	畦 畔 雑 草		2	2	3
	茎葉兼土壌	29	27	14	耕 起 前 雑 草		3	1	2
	適用拡大	9	15	23	休耕田(非農耕地)		5	3	3
稚 苗 移 植	土壌混和	5	9	10	苗 代 (水苗代)		1	0	0
	移植前後	5	10	13	苗 代 (畑苗代)		1	0	0
	土 壌	7	5	7	合 計		144	148	144
	茎葉兼土壌	8	20	18					
	適用拡大	11	18	21					

昭和49年度 水稻作関係供試除草剤名

A. 基礎試験（沖縄石垣島試験地）

SL-27粒, RH-2915乳, 粒, NTN-72K粒, MC-79粒, N-301粒, MT・B-3015粒 (7+7)・(10+7%), MT-101粒, MS-8粒, MS-8・B粒, MK-129粒, MK-129・B粒, SK-23粒, X-52・AM粒, X-52 (-Na1)粒, (-Na2)粒, (-Na3)粒, (-Na4)粒, NP-27水和, NP-31乳, YSH-2粒, YSH-3粒, YSH-5粒, YSH-9粒, YSH-10粒, YSH-12粒, YSH-16粒, YSH-17粒, YSH-24粒, CG-7103粒, CG-102粒, CG-102 (-Na1)粒, (-Na2)粒, (-Na3)粒, (-Na4)粒, (-Na5)粒, KUE-2079A粒, シメトリン粒, NTN-72・K (-Na1)粒, (-Na2)粒, (-Na3)粒, (-Na4)粒, NK-049 (-Na1)粒, (-Na2)粒, NK-049・MA-3粒, S-28 (-Na1)粒, (-Na2)粒, (-Na3)粒, (-Na4)粒, (-Na5)粒, シメトリ

ンM粒, シメトリンMZ-1粒, シメトリンMZ-2粒, BAS-3510水和, BAS-3510液,
MCP・BAS(9+30)液, MCP・BAS(9+20)液, MCP・BAS(6+30)液, HW
-34D乳

B 作用特性試験

(1) 成苗移植

RH-2915乳, RH-2915粒, M-351乳, MT-120粒, NP-27水和, NP-31乳,
KH-191粒, N-301粒, HW-34D乳

(2) 稚苗移植

RH-2915乳, RH-2915粒, RH-2915・SM粒, SL-041; -042; -043液,
CG-109粒, CG-110粒, CG-109・CG-110粒, MT-120粒, MT-220粒,
B-3015・BAS・MCPB粒, MT・B-3015・MCPB粒, SW-741粒, S-64X粒
NTN-80・KM粒, MK-129・M粒, MC-1粒, MC-2粒, MC-3粒, X-52(-Na1)粒
X-52(-Na2)粒

C 変動要因・作用性試験

MS-8粒, SK-23粒, SST粒, モリネート・SM粒, MK-129粒, TH-63(Na)粒, R
H-2915粒, プタクロール粒, MC-79粒, KUE-2079A粒, CG-102粒, モリネート
SM粒, MK-129・M粒, BAS-3510粒

D 第二次適用性試験

I-1 (普通移植栽培-土壤混和)

G-315B乳, 改良G-315乳, M-351乳, NK-049S粒, RH-2915粒, RH-29
15乳, B-3015K乳

I-2 (普通移植栽培-移植前後土壤処理)

MS-8粒, MC-79粒, プタクロール5%粒, B-3015・K粒

I-3 (普通移植栽培-移植後土壤処理)

MC-79粒, MT-101粒, KW-10粒, MT・B-3015(H)粒, U-67粒, KH-19
1粒, AN-1粒, MA-3粒, B-3015・ダイアジノン粒

I-4 (普通移植栽培-茎葉兼土壤処理)

モリネート・SM粒, モリネート・KM粒, CG-102粒, TH-67粒, N-301粒, MCC・MCP
B粒, MCC・M・BAS粒, SMX粒, B-3015・S・MCPB粒, B-3015・BAS粒, B-
3015・S・BAS粒, S-28・S粒, CH-721・S粒, TH-63粒, TH-63(Na)粒

I-5 (普通移植栽培-適用拡大)

CG-102粒, TH-63粒, TH-67粒, モリネート・SM粒, (X-52)→S-28・AM粒, H

OK-06粒, HOK-05粒, (G-315)→MCC・M粒, MCP・BAS水和, MCP・BAS粒, 2,4PA・BAS水和, 2,4PA・BAS粒, MCP・BAS液, MCP・BAS(Na)粒, 2,4PA・BAS(Na)粒, SMX粒, NK-049・S粒, BAS-3510粒, KH-191粒, HOK-05粒, (B-3015)→B-3015・S粒, BAS-3510(Na)液, SST粒

II-1 (稚苗移植栽培—土壤混和处理)

G-315乳 (大型機械散布), G-315乳, G-315(H)乳, 改良G-315乳, NTN-72・K乳, NK-049・S粒, RH-2915粒, RH-2915乳, RH-2915化成肥料, B-3015・K乳

II-2 (稚苗移植栽培—移植前後土壤处理)

MS-8粒, モリネート・K粒, MC-79粒, X-52水和, X-52・K水和, X-52粒, X-52・B粒, NTN-72・K粒, NK-049・S粒, プタクロール50粒, プタクロール2.5粒, SST粒, B-3015K粒

II-3 (稚苗移植栽培—移植後土壤处理)

MT-101粒, NTN-72・K粒, プタクロール50粒, MT・B-3015(H)粒, MT・B-3015粒, MT・B-3015・MCPB粒, B-3015・ダイアジノン粒

II-4 (稚苗移植栽培—茎葉兼土壤处理)

モリネート粒, モリネート・SM粒, モリネート・K粒, モリネート・KM粒, SMZ粒, プタクロールS粒, B-3015・BAS・MCPB粒, B-3015・S・MCPB粒, B-3015・BAS粒, B-3015・S・BAS粒, SW-741粒, SW-742粒, SW-743粒, HOK-05粒, X-52・モリネート・AM粒, TH-63粒, CG-102粒, TH-67粒

II-5 (稚苗移植栽培—適用時期拡大)

CG-102粒, TH-63粒, TH-67粒, MTS-1粒, モリネート・SM粒, モリネート・KM粒, HOK-05粒, HOK-06粒, X-52・モリネート・AM粒, (X-52)→アリアルMCP粒, (X-52)→プロメトリンMCPB粒, (プタクロール)→プロメトリンMCPB粒, SMX粒, プタクロール50粒, プタクロールS粒, SSH-23粒, BAS-3510粒, SST粒, BAS-3510液, MCP・BAS水和, MCP・BAS粒

III-1 (直播栽培—湛水直播)

G-315乳, モリネート・K粒, B-3015・K粒

III-2 (直播栽培—乾田直播)

NTN-80・K水和, MC-79乳, モリネート・SM粒, S-28乳, BAS-3510水和, BAS-3510液, TH-63粒

IV (畦 畔)

NP-24水和, アシュラム液, バラコート起泡剤

V (耕起前)

アシュラム液, MON-39液

VI (休耕田・非農耕地)

MON-39液, NP-24水和, アシュラム液

第2表 昭和49年度水稻作関係除草剤実用化判定表

		実	実 および 継	継 続	継続?	中 止
I 普通 移植 栽培	I-1 土 処 壤 混 和 理		G-315・B乳, 改良G-315乳 NK-049・S粒, RH-2915粒 B-3015・K乳, G-315(H)乳	M-351 乳 RH-2915 乳		
	I-2 移 土 植 壤 前 処 後 理		MS-8粒, MC-79粒 ブタクロール5%粒, B-3015・K粒			
	I-3 移 土 植 壤 後 処 理		MC-79粒, MT-101粒 KW-10粒, MT-B-3015(H)粒 U-67粒, KH-191粒 B-3015・ダイアジノン粒	AN-1 粒 MA-3 粒		
	I-4 茎 土 葉 壤 兼 理		モリネート・SM粒, モリネート・KM粒 CG-102粒, TH-67粒 N-301粒, MCC・M・BAS粒 SMX粒, B-3015・S・BAS粒 B-3015・BAS粒 B-3015・S・MCPB粒 S-28・S粒, CH-721・S粒 TH-63粒, TH-63(Na)粒	MCC・MCPB 粒		
	I-5 適 掘 用 時 期 大		CG-102粒, TH-63粒 TH-67粒, モリネート・SM粒 (X-52)→S-28・AM粒 HOK-06粒, HOK-05粒 (G-315)→MCC・M粒 MCP・BAS水和, MCP・BAS粒 2,4PA・BAS水和 2,4PA・BAS粒, MCP・BAS液 MCP・BAS(Na)粒 2,4PA・BAS(Na)粒, SMX粒 NK-049S粒, BAS-3510粒 KH-191粒, BAS-3510(Na)液	HOK-05 粒 (B-3015)→ B-3015・S粒 SST 粒		

		実	実 および 継	継 続	継続?	中 止
Ⅱ 稚 苗 移 植 栽 培	Ⅱ-1 土 処 壤 混 和 理		G-315乳 (大型機械散布), G-315乳 改良G-315乳, NTN-72-K乳 NK-049-S粒, B-3015-K乳	G-315(H) 乳 RH-2915 粒 RH-2915 乳 RH-2915 化成肥料		
	Ⅱ-2 移 土 植 壤 前 処 後 理	X-52 粒	MS-8粒, モリネート・K粒 MC-79粒, X-52水和 X-52-K水和, X-52-B粒 NTN-72-K粒, NK-049-S粒 ブタクロール50粒, ブタクロール25粒 SST粒, B-3015-K粒			
	Ⅱ-3 移 土 植 壤 後 理		MT-101粒, NTN-72-K粒 ブタクロール50粒 MT・B-3015(H)粒 MT・B-3015粒 MT・B-3015・MCPB粒 B-3015・ダイアジノン粒			
	Ⅱ-4 茎 土 葉 壤 兼 処 理	モリネート 粒	モリネート・SM粒, モリネート・K粒 モリネート・KM粒, ブタクロールS粒 B-3015・BAS・MCPB粒 B-3015・S・MCPB粒 B-3015・BAS粒 B-3015・S・BAS粒, HOK-05粒 X-52・モリネート・AM粒, TH-63粒 CG-102粒, TH-67粒	SMZ 粒 SW-741 粒 SW-742 粒 SW-743 粒		
	Ⅱ-5 適 拡 用 時 期 大	ブタクロール50粒 SSH-23 粒	CG-102粒, TH-63粒 TH-67粒, MTS-1粒 モリネート・SM粒, モリネート・KM粒 HOK-05粒 X-52・モリネート・AM粒 (X-52)→アリアルMCP粒 (X-52)→プロメトリン・MCPB粒 (ブタクロール)→プロメトリン・MCPB粒 SMX粒, ブタクロールS粒 BAS-3510粒, SST粒 BAS-3510液, MCP・BAS水和 MCP・BAS粒	HOK-06 粒		

		実	実 お よ び 継	継 続	継続?	中 止
Ⅲ 直 播 栽 培	Ⅲ-1 湛 水 直 播	G-315 乳	モリネット-K粒, B-3015-K粒			
	Ⅲ-2 乾 田 直 播		モリネット-SM粒, BAS-3510水和 BAS-3510液	NTN-80-K 水和 MC-79 乳 S-28 乳 TH-63 粒		
Ⅳ 畦 畔			アシュラム液, パラコート起泡剤	NP-24 水和		
Ⅴ 耕 起 前			MON-39液	アシュラム 液		
Ⅵ 休 耕 田・非 農 耕 地			MON-39液	NP-24 水和 アシュラム 液		

第3表 昭和49年度水稻関係実用化除草剤使用基準一覧表

	薬 剤 名	処 理 法	適用地域	適用草種	処 理 時 期	使用量	適用土壌	使用上の注意
Ⅰ Ⅰ 成 苗 土 壌 混 和 処 理	G-315 B乳	土 壌 混 和	寒 地 ? 温 暖 地 の 普 通 期	一年生雑草 マツバイ	植 代 直 前 直 後 (-3~-1)	Ⓔ 50cc/a	砂 壤 土 ? 塩 土 (2cm/ 日以下)	1) 混和時の水深 3~5cm 2) 混和深 2~3cm
	改良 G-315 乳	土 壌 混 和	全 域 の 普 通 期 温 暖 地 の 早 期	一年生雑草 マツバイ	植 代 直 前 直 後 (-3~-1)	Ⓔ 50~ 75cc/a	砂 壤 土 ? 塩 土 (極端な漏水 田は除く)	1) 混和時の水深 3~5cm 2) 混和深 2~3cm 3) 吸着の悪い土壌(砂 壤土, 腐植含量の少い 土壌)では水の動きの 少ない場合は薬害の発 生の危険があるので十 分注意する。

薬 剤 名	処理法	適用地域	適用草種	処 理 時 期	使用量	適用土壌	使用上の注意	
111 つぎ	NK-049・S粒	土壌混和	温暖地西部以西の普通期	一年生雑草 マツバイ	植 代 直 前 直 後 (-3~-1)	⊕ 400 g/a	砂壤土～埴土 (2cm/日以下)	1) 混和時の水深 3～5cm 2) 混和深 2～3cm
	RH-2915粒	土壌混和	全 域 の 普 通 期	一年生雑草 マツバイ	植 代 直 前	⊕ 300 g/a	壤土～埴土 (1.5cm/日以下)	
	B-3015・K乳	土壌混和	寒冷地以西の普通期 温暖地東部の早期	一年生雑草 マツバイ	植 代 直 前 直 後 (-3~-1)	⊕ 50～75 cc/a	砂壤土～埴土 (2cm/日以下)	1) 混和時の水深 3～5cm 2) 混和深 2～3cm
	G-315(H)乳	土壌混和	寒地～温暖地東部の普通期 温暖地東部の早期	一年生雑草 マツバイ	植 代 直 前 直 後 (-3~-1)	⊕ 30cc/a	砂壤土～埴土 (極端な漏水田はさける)	1) 混和時の水深 3～5cm 2) 混和深 2～3cm 3) 吸着の悪い土壌(砂壤土、腐植含量の少ない土壌)では水の動きの少ない場合は薬害の発生の危険があるので十分注意する。
112 成苗移植 前後土壌処理	MS-8粒	土壌処理	全域の普通期 温暖地東部の早期	一年生雑草 マツバイ ホタルイ	-3～+8 (ノビエ1Lまで) ホタルイ発生始	⊕ 300 g/a	壤土～埴土 (2cm/日以下)	
			寒 地	一年生雑草 マツバイ ホタルイ ヘラオモダカ	ヘラオモダカ 発生始			
	MC-79粒	土壌処理	全 域 の 普 通 期 温暖地東部の早期	一年生雑草 マツバイ	-3～+3 (ノビエ1Lまで)	⊕ 300 g/a	砂壤土～埴土 (2cm/日以下)	
	ブタクロール5%粒	土壌処理	寒地～温暖地東部	一年生雑草 マツバイ	-3～+3 (ノビエ1.5Lまで)	⊕ 400 g/a	壤土～埴土 (2cm/日以下)	
		全 域 の 普 通 期			⊕ 300 g/a	砂壤土～埴土 (2cm/日以下)		

薬 剤 名	処 理 法	適 用 地 域	適 用 草 種	処 理 時 期	使 用 量	適 用 土 壤	使 用 上 の 注 意	
1 1 2 つぎ	B-3015 ・K粒	土 壌 処 理	全域の普通期 温暖地東部の 早期	一年生雑草 マツバイ	-3~-+0	⊕ 300 g/a	砂壤土~埴土 (2cm/ 日以下)	
1 1 3 成 苗 移 植 後 土 壌 処 理	MC-79 粒	土 壌 処 理	全域の普通期 温暖地東部の 早期	一年生雑草 マツバイ	+3~-+7 (1L)	⊕ 300 g/a	砂壤土~埴土 (2cm/ 日以下)	
	MT-101 粒	土 壌 処 理	温暖地の普通 期	一年生広葉雑 草 マツバイ ウリカワ	+4~-+5 (ウリカワ発生 始~2Lまで)	⊕ 300 g/a	壤土~埴土 (2cm/ 日以下)	
	KW-10 粒	土 壌 処 理	寒冷地南部~ 温暖地の普通 期	一年生雑草 マツバイ	+5~- ノビエ1.5L (+10頃)	⊕ 300~ 400 g/a	壤土~埴土 (2cm/ 日以下)	
	MT・B- 3015(特) 粒	土 壌 処 理	全域の普通期 温暖地東部の 早期	一年生雑草 マツバイ ホタルイ ウリカワ	+5~-ノビエ1.5L (+10頃) ホタルイ: 発生始~2L ウリカワ: 発生始~2L	⊕ 300~ 400 g/a	砂壤土~埴土 (2cm/ 日以下)	
	U-67粒	土 壌 処 理	全域の普通期 暖地の早期	ノビエ カヤツリグサ コナギ マツバイ ホタルイ ミズガヤツリ	+4~- ノビエ1Lまで マツバイ、カヤ ツリグサ、コナ ギ発生盛まで ホタルイ、ミズ ガヤツリ発生前 ~2Lまで	⊕ 300~ 400 g/a	壤土~埴土 (1.5cm/ 日以下)	
	KH-191 粒	土 壌 処 理	寒冷地~温暖 地の普通期	一年生雑草 マツバイ ホタルイ ミズガヤツリ ウリカワ	+4~-ノビエ1.5L ホタルイ ミズガヤツリ ウリカワ 発生始期	⊕ 300~ 400 g/a	壤土~埴土 (2cm/ 日以下)	

薬 剤 名	処理法	適用地域	適用草種	処 理 時 期	使用量	適用土壌	使用上の注意	
I-4 成 苗 茎 葉 兼 土 壌 処 理	モリネート・SM粒	茎葉兼土壌処理	全域の普通期 早期	一年生雑草 マツバイ ヘラオモダカ ホタルイ ウリカワ ミズガヤツリ	+10～ ノビエ2.5L ヘラオモダカ： 始～2L ホタルイ：盛～5L ウリカワ：盛～5L ミズガヤツリ： 始～4L	㊥ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	・シメトリン混合剤の使用上の注意をまもる。
			温暖地東部の 普通期，早期	同上 ヒルムシロ	ヒルムシロ： 増殖初期3～5L			
	モリネート・KM粒	同上理	寒冷地以西の 普通期	一年生雑草 マツバイ ホタルイ ミズガヤツリ ウリカワ	+10～ ノビエ2.5L (+15頃) ホタルイ 発生始～盛期 ミズガヤツリ 発生始～3L ウリカワ 盛期～5L	㊥ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	
			温暖地東部の 早期					
CG-102 粒	同上理	全域の普通期 早期	一年生雑草 マツバイ	+7～ノビエ2.5L (+15頃) 〔但し寒地は +5～ノビエ2L〕	㊥ 300～ 400 g/a	埴土～埴土 (極端な漏水 田は除く)	・シメトリン混合剤と同様の使用上の注意をまもる。	
		寒 地	一年生雑草 マツバイ ヘラオモダカ	ヘラオモダカ 発生始～3L		砂壤土 (3cm/ 日以下)		
TH-67 粒	同上	全域の普通期	一年生雑草 マツバイ ウリカワ ミズガヤツリ	+7～ノビエ2.5L 〔但し寒地では +7～ノビエ2.0L〕 ウリカワ：始～4L ミズガヤツリ： 始～3L ヘラオモダカ 発生始～3Lまで	㊥ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	・シメトリン混合剤と同様の使用上の注意をまもる。	
		寒 地	同上 ヘラオモダカ					
N-301 粒	同上	全域の普通期	一年生雑草 マツバイ	+8～ ノビエ2.5L	㊥ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (2cm/ 日以下)		

薬 剤 名	処理法	適用地域	適用草種	処 理 時 期	使用量	適用土壌	使用上の注意	
I ー 4 C M P	MCC・M ・BAS 粒	茎葉兼土壌処理	寒地～温暖地の普通期	一年生雑草 マツバイ ホタルイ ヘラオモダカ ミズガヤツリ	+10～ ノビエ20L ホタルイ： 始～4L ヘラオモダカ： 始～2L ミズガヤツリ： 盛～4L	⊕ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	
	SMX 粒	同上	温暖地の普通期	一年生雑草 マツバイ ウリカワ	+7～ ノビエ20L ウリカワ： 発生盛～5L	⊕ 300～ 400 g/a	埴土～埴土 (2cm/ 日以下)	・シメトリン混合剤使用上の注意をまもる。
	B-3015 ・S・ MCPB 粒	同上	全域の普通期 温暖地東部の早期	一年生雑草 マツバイ	+10～ ノビエ3L	⊕ 300～ 400 g/a	埴土～埴土 (2cm/ 日以下)	・シメトリン混合剤の使用上の注意をまもる。
			温暖地以西の普通期、温暖地東部の早期	一年生雑草 マツバイ ウリカワ	ウリカワ： 発生盛～5L			
B-3015 ・BAS 粒	同上	寒冷地以西の普通期	一年生雑草 マツバイ ミズガヤツリ	+6～ ノビエ1.5L ミズガヤツリ： 発生始～盛	⊕ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (1.5cm/ 日以下)		
		温暖地西部以西の普通期	一年生雑草 マツバイ ウリカワ	ウリカワ：発生揃 (3～5L)				
B-3015 ・S・BAS 粒	同上	全域の普通期	一年生雑草 マツバイ ホタルイ ウリカワ ミズガヤツリ	+7～ ノビエ2.5L 〔但し 寒地は+7～2L〕 暖地は+7～3L	⊕ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	・シメトリン混合剤の使用上の注意をまもる。	
		温暖地東部の早期	一年生雑草 マツバイ ミズガヤツリ	ホタルイ ウリカワ ミズガヤツリ 発生盛～4L				
S-28・ S 粒	同上	寒地～温暖地の普通期 温暖地東部の早期	一年生雑草 マツバイ	+7～ ノビエ2L	⊕ 300～ 400 g/a	埴土～埴土 (2cm/ 日以下)	・シメトリン混合剤の使用上の注意をまもる。	

薬 剤 名	処 理 法	適 用 地 域	適 用 草 種	処 理 時 期	使 用 量	適 用 土 壤	使 用 上 の 注 意	
I 1 4 成 苗 適 用 時 期 拡 大	CH-721 ・ S 粒	茎 葉 兼 土 壌 処 理	寒冷地～温暖 地東部の普通 期	一年生雑草 マツバイ	+8～ ノビエ2L	⊕ 300～ 400 g/a	壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	・シメトリン混合剤の使 用上の注意をまもる。
	TH-63 粒	同 上	全域の普通期 早期	一年生雑草 マツバイ ウリカワ ミズガヤツリ ヘラオモダカ	+7～ ノビエ2.5L 〔但し寒地は 2Lまで〕 ホタルイ：始～5L ウリカワ： 盛～4.5L ミズガヤツリ： 盛～4.6L ヘラオモダカ： 始～盛(2L)	⊕ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	・シメトリン混合剤と同 様の使用上の注意をま もる。
	TH-63 (Na) 粒	同 上	全域の普通期 早期	一年生雑草 マツバイ ホタルイ ウリカワ ミズガヤツリ ヘラオモダカ	+7～ ノビエ2.5L 〔但し寒地は 2.0Lまで〕 ホタルイ：始～5L ウリカワ：4～5L ミズガヤツリ： 4～6L ヘラオモダカ： 始～盛	⊕ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	・シメトリン混合剤と同 様の使用上の注意をま もる。
I 1 5 成 苗 適 用 時 期 拡 大	CG-102 粒	同 上	寒地～温暖地 の普通期	一年生雑草 マツバイ ヘラオモダカ	田植前後土壌処 理した場合 +15～+20 ノビエ2.5Lまで ヘラオモダカ 始～盛(2L) 〔但し寒地は ノビエ2.0Lまで〕	⊕ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (3cm/ 日以下)	・前処理剤と組合わせて 使用する。 ・シメトリン混合剤と同 様の注意をまもる。
	TH-63 粒	同 上	寒地～温暖地 の普通期 温暖地東部の の早期	一年生雑草 マツバイ ホタルイ ミズガヤツリ ウリカワ ヘラオモダカ	田植前後土壌処 理をした場合 +15～+20 ノビエ：2.5Lまで ホタルイ： 発生盛～5Lまで	⊕ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	・シメトリン混合剤と同 様の注意をまもる。

薬 剤 名	処 理 法	適 用 地 域	適 用 草 種	処 理 時 期	使 用 量	適 用 土 壤	使 用 上 の 注 意
1-5 つづき	(つづき) 茎葉兼土壌処理			ミズガヤツリ： 盛～4～6 L ウリカワ： 盛～5 L ヘラオモダカ： 始～2 L (但し寒地では ノビエ2 Lまで)			
TH-67 粒	同 上	寒冷地～温暖 地東部の普通 期	一年生雑草 マツバイ ウリカワ	田植前後土壌処 理した場合 +15～+20 ノビエ： 2.5 Lまで ウリカワ： 盛～4 Lまで	㊥ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (2 cm/ 日以下)	・シメトリン混合剤と同 様の注意をまもる。
モリネート・ SM粒	同 上	寒 地	一年生雑草 マツバイ ヘラオモダカ ホタルイ	田植前後土壌処 理した場合 +20～+25 ノビエ： 2.5 Lまで ヘラオモダカ： 始～2 L ホタルイ： 始～2 L	㊥ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (2 cm/ 日以下)	・シメトリン混合剤の使 用上の注意をまもる。
(X-52)→ S-28・ AM粒	同 上	寒冷地～温暖 地東部の普通 期	一年生雑草 マツバイ ウリカワ	田植前後土壌処 理した場合 +15～+25 ノビエ： 1.5 Lまで ウリカワ： 盛～5 Lまで	㊥ 300 g/a	砂壤土～埴土 (2 cm/ 日以下)	・前処理剤としては、一 年生雑草、マツバイ、 およびウリカワに有効 な薬剤を使用する。
HOK-06 粒	同 上	全域の普通期 温暖地東部の 早期 温暖地東部の 普通期、早期	一年生雑草非 イネ科 ウリカワ ホタルイ 一年生雑草非 イネ科 ウリカワ、ホ タルイ、セリ	田植前後土壌処 理をした場合 +25～+30 ウリカワ： 盛～4 L ホタルイ： 盛～3 L セリ： 増殖初期まで	㊥ 300～ 400 g/a	埴土～埴土 (2 cm/ 日以下)	(1)前処理剤と組み合わ せて使用する。 (2)セリは水没状態で効果 が高い。

薬 剤 名	処理法	適用地域	適用草種	処 理 時 期	使用量	適用土壌	使用上の注意	
I ー 5 草 用	HOK-05 粒	茎葉兼土壌処理	寒冷地以西の 普通期	一年生雑草 マツバイ ウリカワ ホタルイ	田植前後土壌処 理した場合 +15～+25 ノビエ：2Lまで ウリカワ： 始～4L ホタルイ： 始～3L セリ： 増殖初期まで	㊥ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (3cm/ 日以下)	(1)前処理剤と組み合わせて使用する。 (2)セリは水没状態で効果高い。 (3)シメトリン混合剤の使用上の注意をまもる。
			温暖地東部の 早期	一年生雑草 マツバイ、ウ リカワ、ホタ ルイ、セリ				
			温暖地東部の 普通期、早期	一年生雑草 マツバイ ヘラオモダカ ホタルイ ミズガヤツリ				
			寒地～温暖地 の普通期	一年生雑草 マツバイ ヘラオモダカ ホタルイ ミズガヤツリ 発生始～2L				
(G-315) → MCC ・M粒	同 上	寒地～温暖地 の普通期	一年生雑草 マツバイ ヘラオモダカ ホタルイ ミズガヤツリ	田植前後土壌処 理した場合 +20～+25 ノビエ ヘラオモダカ ホタルイ ミズガヤツリ 発生始～2L	㊥ 300～ 400 g/a	埴土～埴土 (2cm/ 日以下)	・前処理剤との組合せで使用する。	
MCP・ BAS水和	同 上	寒地～温暖地 西部(近畿) の普通期 温暖地東部の 早期	一年生非イネ 科 ホタルイ ミズガヤツリ ウリカワ ヘラオモダカ	MCP処理期に 準ずる。 一年生非イネ科 ：生育期 ホタルイ： 揃～4L ミズガヤツリ： 揃～7.8L ウリカワ： 塊茎形成前 ヘラオモダカ： 揃～4.5L	㊥ 67～ 100 g/a	砂壤土～埴土 * (1.5cm/ 日以下) * (湛水処理の 場合)	・前処理剤との組合せで使用する。 ・寒地：湛水散布 ・寒冷地、温暖地：湛水散布、浅水処理または落水処理でも可。	
MCP・ BAS粒	茎葉 処理	全岐の普通期 早期	一年生非イネ 科 ホタルイ ミズガヤツリ ウリカワ ヘラオモダカ	MCP処理期に 準ずる。 一年生非イネ科 ：生育期 ホタルイ： 揃～4Lまで ミズガヤツリ： 揃～5～6L ウリカワ： 塊茎形成前 ヘラオモダカ： 揃～4～5L	㊥ 200～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (1.5cm/ 日以下)	・前処理剤との組合せで使用する。	

薬 剤 名	処 理 法	適 用 地 域	適 用 草 種	処 理 時 期	使 用 量	適 用 土 壌	使 用 上 の 注 意
I 1 5 つ き	2,4 PA・ BAS水和	茎 葉 落 水 処 理	温暖地以西の 普通期	一年生非イネ 科 ホタルイ ミズガヤツリ ウリカワ	2,4 PA処理 期に準ずる。 一年生非イネ科 ：生育期 ホタルイ： 摘〜4 L ミズガヤツリ： 摘〜7〜8 L ウリカワ： 塊茎形成前	⊕ 67〜 100 g/a	砂壤土〜埴土 ・前処理剤との組合せて 使用する。 (落水処理)
	2,4 PA・ BAS粒	茎 葉 処 理	温暖地以西の 普通期	一年生非イネ 科 ホタルイ ミズガヤツリ ウリカワ	2,4 PA処理 期に準ずる。 一年生非イネ科 ：生育期 ホタルイ： 摘〜4 L ミズガヤツリ： 摘〜5〜6 L ウリカワ： 塊茎形成前	⊕ 200〜 400 g/a	砂壤土〜埴土 (1.5 cm/ 日以下) ・前処理剤との組合せて 使用する。
	MCP・ BAS液	茎 葉 落 水 処 理	全域の普通期 早期	一年生非イネ 科 ホタルイ ミズガヤツリ ウリカワ	MCP処理期に 準ずる。 一年生非イネ科 ：生育期 ホタルイ： 摘〜4 L ミズガヤツリ： 摘〜7〜8 L ウリカワ： 塊茎形成前	⊕ 50〜75 cc/a	砂壤土〜埴土 ・前処理剤との組合せて 使用する。 (落水処理)
	MCP・ BAS(Na) 粒	茎 葉 処 理	寒冷地〜温暖 地東部の普通 期 温暖地東部の 早期	一年生非イネ 科 ホタルイ ウリカワ	MCP処理期に 準ずる。 一年生非イネ科 ：生育期 ホタルイ： 摘〜4 L ウリカワ： 塊茎形成前	⊕ 200〜 300 g/a	砂壤土〜埴土 (1.5 cm/ 日以下) ・前処理剤と組合せて使 用する。
	2,4 PA・ BAS(Na) 粒	茎 葉 処 理	温暖地以西の 普通期	一年生非イネ 科、ホタルイ ミズガヤツリ ウリカワ	2,4 PA処理 期に準ずる。 一年生非イネ科 ：生育期	⊕ 200〜 300 g/a	砂壤土〜埴土 (1.5 cm/ 日以下) ・前処理剤と組合せて使 用する。

薬 剤 名	処 理 法	適 用 地 域	適 用 草 種	処 理 時 期	使 用 量	適 用 土 壤	使 用 上 の 注 意
1 1 5 つづき	(つづき)			ホタルイ： 揃～4 L ミズガヤツリ： 揃～5～6 L ウリカワ： 塊茎形成前			
SMX 粒	茎葉兼土壌処理	寒 冷 地	一年生雑草 マツバイ ホタルイ ミズガヤツリ	田植前後土壌処理をした場合 +15～+25 ノビエ： 2 Lまで ホタルイ： 盛～3 L ミズガヤツリ： 盛～5 L	⊕ 300 g/a	壤土～埴土 (2 cm/ 日以下)	- 前処理剤と組合せて使用する。 - シメトリン混合剤の使用上の注意をまもる。
NK-049 ・S粒	土 壌 処 理	寒 冷 地	一年生雑草 マツバイ	—4～—2	⊕ 300～ 400 g/a	壤土～埴土 (2 cm/ 日以下)	抑制期間が短いので、組合せ処理の前処理剤として使用する。
BAS— 3510粒	茎 葉 処 理	全域の普通期	一年生非イネ科 ホタルイ ウリカワ ミズガヤツリ ヘラオモダカ	一年生非イネ科 ：発生盛～揃まで ホタルイ ウリカワ ミズガヤツリ ヘラオモダカ 発生盛～増殖 初期まで	⊕ 300～ 600 g/a	砂壤土～埴土 (1.5 cm/ 日以下)	前処理剤との組合せて使用する。
KH-191 粒	土 壌 処 理	寒冷地～温暖 地の普通期	一年生雑草 マツバイ ホタルイ ウリカワ	田植前後土壌処理した場合 +10～+15 ノビエ： 1.5 Lまで ホタルイ：発生始 ウリカワ：発生始	⊕ 300～ 400 g/a	壤土～埴土 (2 cm/ 日以下)	前処理剤との組合せて使用する。
BAS— 3510 (Na)液	茎 葉 溶 水 処 理	暖 地	一年生非イネ科 ウリカワ ミズガヤツリ	一年生非イネ科 ：盛～揃 ウリカワ ミズガヤツリ 発生盛～増殖 初期まで	⊕ 60～80 cc/a	全 土 壤	- 稀釈水量 5～7 l/a でよく茎葉にかゝるよう散布する。 - 前処理剤との組合せて使用する。 - 入水は、1日おいてからおこなう。

薬 剤 名	処理法	適用地域	適用草種	処 理 時 期	使用量	適用土壌	使用上の注意	
I 1 3	B-3015・ ダイアジノン 粒	土 壌 処 理	温暖地東部の 普通期、早期 ダイアジノン が適用出来る 地帯	一年生雑草 マツバイ	+4～+10	⊕ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (極端な漏水 田は除く)	
II 1 1 稚 苗 土 壌 混 和 処 理	G-315 乳 (大型機械 散布)	土 壌 混 和	温暖地以西の 普通期	一年生雑草 マツバイ	植代直前直後 -5～-1	⊕ 50cc/a	砂壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	(1)混和時の水深3～5cm (2)混和深 2～3cm (3)吸着の悪い土壌(砂壤 土、腐植含量の少い土 壌)では水の動きの少 い場合は薬害の発生 の危険があるので十分注 意する。
	G-315 乳	同 上	全域の普通期 温暖地の早期 暖地の早期	一年生雑草 マツバイ	植代直前直後 (-3～-1)	⊕ 50cc/a	砂壤土～埴土 (2cm/日以下)	(1)混和時の水深3～5cm (2)混和深 2～3cm (3)吸着の悪い土壌(砂壤 土、腐植含量の少い土 壌)では水の動きの少 ない場合は薬害の発生 の危険があるので十分注 意する。
						⊕ 50cc/a	埴土～埴土	
						⊕ 36～50 cc/a	(2cm/ 日以下)	
	改良G- 315乳	同 上	全域の普通期	一年生雑草 マツバイ	植代直前直後 (-7～-1)	⊕ 50～60 cc/a	砂壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	(1)混和時の水深3～5cm (2)混和深 2～3cm (3)吸着の悪い土壌(砂壤 土、腐植含量の少い土 壌)では水の動きの少 い場合は薬害の発生 の危険があるので十分注 意する。
NTN- 72・K乳	同 上	寒冷地以西の 普通期 温暖地東部の 早期	一年生雑草 マツバイ	植代直前直後 (-7～-1)	⊕ 100～ 120 cc/a	砂壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	(1)混和時の水深3～5cm (2)混和深 2～3cm	
NK- 049・S 粒	同 上	温暖地西部以 西の普通期	一年生雑草 マツバイ	植代直前直後 (-5～-1)	⊕ 400～ 500 g/a	砂壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	(1)混和時の水深3～5cm (2)混和深 2～3cm (3)抑草期間が短いので組 合せ処理の前処理剤と して使用する。	

薬 剤 名	処 理 法	適 用 地 域	適 用 草 種	処 理 時 期	使 用 量	適 用 土 壌	使 用 上 の 注 意	
Ⅱ Ⅰ つづき	B-3015 ・K乳	土 壌 混 和	寒冷地以西の 普通期、早期	一年生雑草 マツバイ	植代直前直後 (-3~-1)	㊟ 50~75 cc/a	砂壤土〜埴土 (2cm/ 日以下)	(1)混和時の水深3〜5cm (2)混和深 2〜3cm
Ⅱ 2 稚 苗 移 植 前	MS-8粒	土 壌 処 理	寒冷地〜温暖 地の普通期 温暖地東部の 早期	一年生雑草 マツバイ ホタルイ	-3〜+7 (ノビエ1L) ホタルイ： 1Lまで	㊟ 300 g/a	埴土〜埴土 (2cm/ 日以下)	
			寒地および暖 地の普通期	-3~-2 +3〜+7 ノビエ：1Lまで ホタルイ：1Lまで				
後 土 壌 処 理	モリネート・ K粒	同 上	温暖地以西の 普通期 暖地の早期	一年生雑草 マツバイ	-3~-2 +3〜+6 +3〜+7	㊟ 300 g/a	砂壤土〜埴土 (2cm/ 日以下)	
	MC-79 粒	同 上	全域の普通期 温暖地東部の 早期	一年生雑草 マツバイ	-3〜+8 (ノビエ 1Lまで)	㊟ 300〜 400 g/a	砂壤土〜埴土 (2cm/ 日以下)	
	X-52 水和	同 上	温暖地の普通 期	一年生雑草 マツバイ	田植当日 (±0)	㊟ 30g/a	埴土〜埴土 (2cm/ 日以下)	・移植前後に滴下処理す る。 移植直後の場合は、 ・水稻の茎葉にかからな いように注意する。
	X-52・K 水和	同 上	温暖地の普通 期	一年生雑草 マツバイ	田植当日 (±0)	㊟ 60g/a	埴土〜埴土 (2cm/ 日以下)	同 上
	X-52粒	同 上	全域の普通期 早期	一年生雑草 マツバイ	-3〜+3 +4〜ノビエ1L (+8頃)	㊟ 300 g/a	砂壤土〜埴土 (極端な漏水 田はさける)	
	X-52・ B粒	同 上	寒冷地南部〜 温暖地	一年生雑草 マツバイ (次頁つづく)	-3~-2 +3〜+4	㊟ 300〜 400 g/a	埴土〜埴土 (2cm/ 日以下)	

Ⅱ
1
2
C
M

薬 剤 名	処 理 法	適 用 地 域	適 用 草 種	処 理 時 期	使 用 量	適 用 土 壤	使 用 上 の 注 意
(つづき)		寒冷地南部	一年生雑草 マツバイ ホタルイ ミズガヤツリ	ミズガヤツリ ホタルイ 発生始			
		温暖地東部の 普通期	一年生雑草 マツバイ ミズガヤツリ				
NTN- 72・K 粒	土 壌 処 理	寒冷地以西の 普通期	一年生雑草 マツバイ	-3~+3 (ノビエ 1Lまで)	⊕ 300 g/a	砂壤土~埴土 (2cm/ 日以下)	
NK-049 ・S 粒	同 上	寒冷地以西の 普通期 温暖地東部の 早期	一年生雑草 マツバイ	-3~-2 +2~+3	⊕ 300~ 400 g/a	砂壤土~埴土 (2cm/ 日以下)	・抑草期間が短いので組 合せ処理の前処理剤と して使用する。
ブタクロール 5%粒	同 上	全域の普通期	一年生雑草 マツバイ ホタルイ	+3 〔ホタルイ： 発生前~2L ミズガヤツリ： 発生前~3L〕	⊕ 300 g/a	壤土~埴土 (2cm/ 日以下)	
ブタクロール 2.5%粒	同 上	全域の普通期 温暖地東部の 早期	一年生雑草 マツバイ	-3~+3 ホタルイ 発生前~2L	⊕ 300~ 400 g/a	砂壤土~埴土 (2cm/ 日以下)	
		寒 冷 地	一年生雑草 マツバイ ホタルイ				
SST 粒	同 上	全域の普通期	一年生雑草 マツバイ	+3~+5 (ノビエ1L)	⊕ 300~ 400 g/a	壤土~埴土 (2cm/ 日以下)	
		温暖地以北の 普通期	一年生雑草 マツバイ ホタルイ	ホタルイ： 発生始			
B-3015 ・K 粒	同 上	寒冷地~温暖 地の普通期	一年生雑草 マツバイ	-3~+6	⊕ 300 g/a	砂壤土~埴土 (2cm/ 日以下)	
		暖地の普通期	一年生雑草, マツバイ, ホ タルイ, ミズ ガヤツリ	-3~+0 ホタルイ ミズガヤツリ 発生前			

薬 剤 名		処理 法	適用地域	適用草種	処 理 時 期	使用量	適用土壌	使用上の注意
Ⅱ 1 3 稚 苗 移 植 後 土 壌 処 理	MT-101 粒	土 壌 処 理	温暖地以西の 普通期	一年生広葉雑 草 マツバイ ウリカワ	+5～+10 一年生広葉雑草 マツバイ： 発生始 ウリカワ： 始～3Lまで	⊕ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	
	NTN-72 ・K粒	同 上	温暖地以西の 普通期	一年生雑草 マツバイ	+5～ノビエ 1.5L (+10頃)	⊕ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	
	ブタクロール 5%粒	同 上	全域の普通期	一年生雑草 マツバイ ホタルイ ミズガヤツリ	+4～ノビエ 1.5L ホタルイ： 発生前～2L ミズガヤツリ： 発生始～3L	⊕ 300 g/a	埴土～埴土 (2cm/ 日以下)	
	MT・B- 3015(H) 粒	同 上	全域の普通期	一年生雑草 マツバイ ウリカワ ホタルイ	+5～ノビエ 1.5L ウリカワ ホタルイ 始～2Lまで ミズガヤツリ： 始～2Lまで	⊕ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	
			寒冷地以西の 普通期	一年生雑草， マツバイ，ウ リカワ，ホタ ルイ，ミズガ ヤツリ				
	MT・B- 3015 粒	同 上	寒冷地以西の 普通期	一年生雑草 マツバイ	+5～ノビエ 1.5L ホタルイ： 始～2L ウリカワ： 始～2L	⊕ 300～ 400 g/a	埴土～埴土 (2cm/ 日以下)	
			寒 冷 地	一年生雑草 マツバイ ホタルイ ウリカワ				
	MT・B- 3015・ MCPB 粒	同 上	温暖地以西の 普通期	一年生雑草 マツバイ ウリカワ	+5～ノビエ 2L ウリカワ： 始～4L ホタルイ： 始～2L	⊕ 300～ 400 g/a	埴土～埴土 (1cm/ 日以下)	
			温暖地西部の 普通期	一年生雑草 マツバイ ウリカワ ホタルイ				

薬 剤 名	処 理 法	適 用 地 域	適 用 草 種	処 理 時 期	使 用 量	適 用 土 壌	使 用 上 の 注 意	
Ⅱ ー 3 つぎ	B-3015 ・ダイアジ ノン粒	土 壌 処 理	温暖地東部の 普通期，早期 でダイアジノ ンが適用出来 る地帯	一年生雑草 マツバイ	+4～+10 (ノビエ 1.5Lまで)	㊟ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (極端な漏水 田は除く)	
Ⅱ ー 4 稚 苗 茎 葉 兼 土 壌 処 理	モリネット 粒	茎 葉 兼 土 壌 処 理	ノビエ ホタルイ	+4～ ノビエ2L ホタルイ： 始～2Lまで	㊟ 300～ 400 g/a	埴壤土～埴土 (2cm/ 日以下)		
	モリネット・ SM粒	同 上	寒冷地～温暖 地の普通期 温暖地東部及 暖地の早期	一年生雑草 マツバイ ウリカワ	+15～ ノビエ3.5L 但し寒地は2.5L ウリカワ： 盛～5L ホタルイ： 始～2L ミズガヤツリ： 始～3L ヘラオモダカ： 始～2L	㊟ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	・シメトリン混合剤の使 用上の注意をまもる。
	モリネット・ K粒	同 上	寒冷地以西の 普通期 温暖地東部の 早期	一年生雑草 マツバイ	+5～ノビエ 2.5L ホタルイ： 始～2L	㊟ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	
	モリネット・ KM粒	同 上	寒冷地以西の 普通期 温暖地東部の 早期	一年生雑草 マツバイ ホタルイ	+10～ ノビエ3L 但し寒冷地は 2.5Lまで ホタルイ： 始～2L ウリカワ： 始～4L ミズガヤツリ： 始～3L	㊟ 300～ 400 g/a	〔温暖地以西 の普通期〕 砂壤土～埴土 (2cm/ 日以下) 〔寒冷地〕 埴土～埴土 (2cm/ 日以下)	

薬 剤 名	処理法	適用地域	適用草種	処 理 時 期	使用量	適用土壌	使用上の注意	
Ⅱ 1 4 つづき	ブタクロール・S粒	茎葉兼土壌処理	寒冷地～温暖地の普通期 温暖地東部の早期	一年生雑草 マツバイ	+ 8 ～ ノビエ 2 L (+ 1 2 頃)	⊕ 300 ～ 400 g/a	壤土～埴土 (2 cm / 日以下)	・シメトリン混合剤の使用上の注意をまもる。
	B-3015 ・BAS ・MCPB粒	同上	温暖地西部以西の普通期	一年生雑草 マツバイ ウリカワ	+ 7 ～ ノビエ 2.5 L ウリカワ： 始～3 L	⊕ 300 ～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (1.5 cm / 日以下)	
			温暖地東部の普通期	一年生雑草 マツバイ ホタルイ	ホタルイ： 始～3 L			
	B-3015 ・S ・MCPB粒	同上	寒地～温暖地の普通期	一年生雑草 マツバイ ホタルイ	+ 1.5 ～ ノビエ 3 L 〔但し寒地は + 7 ～ノビエ 2 L〕	⊕ 300 ～ 400 g/a	壤土～埴土 (2 cm / 日以下)	・シメトリン混合剤の使用上の注意をまもる。
寒冷地、温暖地の普通期			一年生雑草 マツバイ ウリカワ	ホタルイ： 始～3 L ウリカワ： 始～4 L				
寒 冷 地			一年生雑草 マツバイ ミズガヤツリ	ミズガヤツリ： 始～4 L				
B-3015 ・BAS 粒	同上	寒冷地以西の普通期	一年生雑草 マツバイ	+ 6 ～ ノビエ 1.5 L 〔但し寒冷地は + 8 ～1.5 L〕	⊕ 300 ～ 400 g/a	壤土～埴土 (1.5 cm / 日以下)		
		寒 冷 地	一年生雑草 マツバイ ホタルイ	ホタルイ： 始～4 L ウリカワ： 3 ～5 L				
		暖地の普通期	一年生雑草 マツバイ ウリカワ					
B-3015 ・S・BAS 粒	同上	寒冷地～温暖地の普通期 温暖地東部の早期	一年生雑草 マツバイ ミズガヤツリ ホタルイ ウリカワ	+ 8 ～ ノビエ 2.5 L 〔但し寒地は + 7 ～2.0 L〕 ミズガヤツリ： 盛～4 L ホタルイ： 盛～3 L ウリカワ： 盛～3 L	⊕ 300 ～ 400 g/a	壤土～埴土 (2 cm / 日以下)	・シメトリン混合剤の使用上の注意をまもる。	

薬 剤 名	処 理 法	適 用 地 域	適 用 草 種	処 理 時 期	使 用 量	適 用 土 壤	使 用 上 の 注 意	
Ⅱ 1 4 つ づ き	HOK-05 粒	茎 葉 兼 土 壌 処 理	寒冷地～温暖 地の普通期	一年生雑草 マツバイ ホタルイ ヘラオモダカ	+10～ ノビエ20L ホタルイ： 始～2L ヘラオモダカ： 始～3L ウリカワ： 盛～5L	⊕ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (1.5cm/ 日以下)	
			温暖地西部以 西の普通期	一年生雑草 マツバイ ウリカワ				
	X-52・ モリネット ・AM粒	同 上	温暖地の普通 期	一年生雑草 マツバイ	+8～ ノビエ25L	⊕ 300～ 400 g/a	壤土～埴土 (2.0cm/ 日以下)	
			暖地の普通期	一年生雑草 マツバイ ミズガヤツリ	〔但し温暖地東部 は、+12～ ノビエ25L〕 ミズガヤツリ： 始～4L			
	TH-63 粒	同 上	寒冷地以西の 普通期，早期	一年生雑草 マツバイ ホタルイ ウリカワ ミズガヤツリ	+8～ ノビエ25L 〔但し寒地は +7～2L 寒冷地は +10～25L〕 ホタルイ： 始～5L ウリカワ： 盛～4.5L ミズガヤツリ： 盛～4.6L ヘラオモダカ： 始～盛(2L)	⊕ 300 g/a	壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	・シメトリン混合剤と同 様の使用上の注意をま もる。
			寒地～寒冷地	一年生雑草 マツバイ ヘラオモダカ				
	CG-102 粒	同 上	寒冷地以西の 普通期 暖地の早期	一年生雑草 マツバイ	+8～ ノビエ25L 〔但し寒地は +7～2.0L 寒冷地は +10～25L〕 ヘラオモダカ： 発生始～盛(2L)	⊕ 300 g/a	壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	同 上
			寒地～寒冷地	一年生雑草 マツバイ ヘラオモダカ				
	TH-67 粒	同 上	寒冷地以西の 普通期 温暖地東部の 早期	一年生雑草 マツバイ ウリカワ	+10～ ノビエ25L ウリカワ： 盛～4L (次頁つづく)	⊕ 300～ 400 g/a	壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	同 上

薬 剤 名		処 理 法	適 用 地 域	適 用 草 種	処 理 時 期	使 用 量	適 用 土 壤	使 用 上 の 注 意
Ⅱ — 4 0 0 a	(つづき)		寒 冷 地	一年生雑草 マツバイ ミズガヤツリ	ミズガヤツリ： 盛～4.5 L			
	CG-102 粒	茎葉兼土壌処理	全域の普通期	一年生雑草 マツバイ	移植前後土壌処理した場合 +15～+25 (ノビエ2.5 L まで、但し、寒 地は2 Lまで) ヘラオモダカ： 発生始～盛(2L)	⊕ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (2 cm/ 日以下)	- シメトリン混合剤と同様の使用上の注意をまもる。 - 前処理剤との組合せて使用する。
	TH-63 粒	同上	全域の普通期 温暖地の早期	一年生雑草 マツバイ ホタルイ ウリカワ	移植前後土壌処理した場合 +15～+25 (ノビエ2.5 L) 但し寒地は2.0 L ホタルイ： 盛～5 L ウリカワ： 盛～5 L ヘラオモダカ： 始～盛(2L) ミズガヤツリ： 盛～4.6 L	⊕ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (2 cm/ 日以下)	- 同 上 - 同 上
	TH-67 粒	同上	全域の普通期	一年生雑草 マツバイ ウリカワ	移植前後土壌処理した場合 +15～+25 (ノビエ2.5 L) 但し寒地は2.0 L ウリカワ： 盛～5 Lまで ミズガヤツリ： 盛～5 L ホタルイ： 盛～5 L ヘラオモダカ： 始～盛(2L)	⊕ 300～ 400 g/a	砂壤土～埴土 (2 cm/ 日以下)	- 同 上 - 同 上
			寒冷地～温暖地の普通期	一年生雑草 マツバイ ミズガヤツリ ホタルイ				
			寒地～寒冷地	一年生雑草 マツバイ ヘラオモダカ				

薬 剤 名		処 理 法	適 用 地 域	適 用 草 種	処 理 時 期	使 用 量	適 用 土 壌	使 用 上 の 注 意
Ⅱ 1 5 う き	MTS-1 粒	土 壌 処 理	寒 冷 地	一年生雑草 マツバイ ホタルイ	-3~+3 ノビエ1Lまで ホタルイ： 発生始	⊕ 300~ 400 g/a	壤土~埴土 (2cm/ 日以下)	・体系処理の前処理剤と して使用する。
	モリネート・ SM粒	茎 葉 兼 土 壌 処 理	寒地~温暖地 東部の普通期 早期	一年生雑草 マツバイ	移植前後土壌処 理した場合 +20~+30 (ノビエ3.5L まで、但し寒地 は2.5Lまで) ホタルイ： 始~2L ヘラオモダカ： 始~2L ウリカワ： 始~3L	⊕ 300~ 400 g/a	砂壤土~埴土 (2cm/ 日以下)	・シメトリン混合剤の使 用上の注意をまもる。
			寒地~寒冷地	一年生雑草 マツバイ ホタルイ ヘラオモダカ				
			寒 冷 地	一年生雑草 マツバイ ウリカワ				
	モリネート・ KM粒	同 上	寒 冷 地	一年生雑草 マツバイ ホタルイ	移植前後土壌処 理した場合 +18~+25 (ノビエ2.5L まで) ホタルイ： 始~2L	⊕ 300~ 400 g/a	砂壤土~埴土 (2cm/ 日以下)	
	HOK-05 粒	同 上	寒冷地以西の 普通期	一年生雑草 マツバイ	移植後土壌処理 した場合 +20~+25 (ノビエ2Lまで) ホタルイ： 始~2L ヘラオモダカ： 始~3L ウリカワ： 始~5L	⊕ 300~ 400 g/a	壤土~埴土 (2cm/ 日以下) 砂壤土 (1cm/ 日以下)	・前処理剤との組合せで 使用する。 ・シメトリン混合剤の使 用上の注意をまもる。
			寒 冷 地	一年生雑草 マツバイ ホタルイ ヘラオモダカ				
			温暖地以西の 普通期	一年生雑草 マツバイ ウリカワ				
	X-52・ モリネート ・AM粒	同 上	寒地~温暖地 の普通期	一年生雑草 マツバイ	移植前後土壌処 理した場合 +20~+30 (ノビエ 2.5Lまで) ミズガヤツリ： 発生始~4L	⊕ 300 g/a	壤土~埴土 (2cm/ 日以下)	・前処理剤との組合せで 使用する。
			寒 冷 地	一年生雑草 マツバイ ウリカワ ミズガヤツリ				

薬 剤 名	処理法	適用地域	適用草種	処 理 時 期	使用量	適用土壌	使用上の注意	
Ⅱ 1 5 つ き	(X-52)→ アリンMCP 粒	茎葉兼土壌処理	温暖地東部の 普通期 温暖地西部以 西の普通期, 早期	一年生広葉雑 草, ウリカワ	移植前後土壌処 理した場合 +15~ ウリカワ 4.5 L	㊟ 300~ 400 g/a	壤土~埴土 (1.5 cm/ 日以下) 温暖地東部の 普通期では, 砂壤土(1.5 cm/日以下) 含む。	・ウリカワ多発田を対象 とする。 ・ウリカワにも有効な前 処理剤との組合せで使 用する。
	(X-52)→ プロメトリン ・MCPB 粒	同 上	寒 冷 地	一年生雑草 マツバイ	移植前後土壌処 理した場合 +20~+25 (ノビエ 1.5L) ウリカワ: 始~4 L	㊟ 300~ 400 g/a	壤土~埴土 (2 cm/ 日以下)	・ウリカワにも有効な前 処理剤との組合せで使 用する。 ・シメトリン混合剤と同 様の使用上の注意をま もる。
	温暖地東部の 普通期		一年生雑草 マツバイ ウリカワ					
	(ブタクロール)→ プロメトリン ・MCPB 粒	同 上	寒 冷 地	一年生雑草 マツバイ ミズガヤツリ ヘラオモダカ ホタルイ	移植前後土壌処 理した場合 +20~+25 (ノビエ 1.5L) ミズガヤツリ: 始~2 L ヘラオモダカ: 始~2 L ホタルイ: 始~2 L	㊟ 300~ 400 g/a	壤土~埴土 (2 cm/ 日以下)	・ミズガヤツリ, ホタル イにも有効な前処理剤 との組合せで使用する。 ・シメトリン混合剤と同 様の使用上の注意をま もる。
	SMX 粒	同 上	寒 冷 地	一年生雑草 マツバイ ホタルイ	移植前後土壌処 理した場合 +20~+25 (ノビエ 2.0L) ホタルイ: 盛~3 L	㊟ 300 g/a	壤土~埴土 (2 cm/ 日以下)	・前処理剤との組合せで 使用する。 ・シメトリン混合剤の使 用上の注意をまもる。
ブタクロール ・S 粒	同 上	寒地~温暖地 の普通期	一年生雑草 マツバイ	移植前後土壌処 理をした場合 +15~+25 (ノビエ 2 Lまで) ヘラオモダカ: 始~2 L ホタルイ: 始~2 L	㊟ 300~ 400 g/a	壤土~埴土 (2 cm/ 日以下)	・前処理剤との組合せで 使用する。 ・シメトリン混合剤の使 用上の注意をまもる。	
		寒地, 寒冷地	一年生雑草 マツバイ ヘラオモダカ ホタルイ					

薬 剤 名	処 理 法	適 用 地 域	適 用 草 種	処 理 時 期	使 用 量	適 用 土 壤	使 用 上 の 注 意	
Ⅱ 1 5 き う う	SSH-23 粒	土 壌 処 理	寒 冷 地	一年生雑草 マツバイ ホタルイ	移植前後土壌処 理した場合 +20～+25 (ノビエ 1.0Lまで) ホタルイ： 始～2Lまで	⊕ 300～ 400 g/a	壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	・前処理剤との組合せで 使用する。
	BAS- 3510 粒	茎 葉 処 理	全域の普通期 温暖地東部の 早期	一年生非イネ 科 ホタルイ ウリカワ ミズガヤツリ ヘラオモダカ	移植前後土壌処 理をした場合 一年生非イネ科 発生盛～揃 ホタルイ ウリカワ ミズガヤツリ ヘラオモダカ 発生盛～増殖 初期	⊕ 300～ 600 g/a	砂壤土～埴土 (1.5cm/ 日以下)	同 上
	SST 粒	土 壌 処 理	温暖地以西の 普通期	一年生雑草 マツバイ クログワイ	移植前後土壌処 理した場合 +14～+20 (ノビエ 1Lまで) クログワイ： 始～草丈4.5 cmまで	⊕ 400 g/a	壤土～埴土 (2cm/ 日以下)	・クログワイにも有効な 前処理剤との組合せで 使用する。 ・クログワイ多発田を対 象とする。
	BAS- 3510 液	茎 葉 落 水 処 理	温暖地西部以 西の普通期	一年生非イネ 科 ウリカワ ホタルイ ミズガヤツリ	一年生非イネ科 発生盛～揃 ウリカワ ホタルイ ミズガヤツリ 発生盛～増殖 初期	⊕ 60～80 cc/a	全 土 壤	・前処理剤との組合せで 使用する。 ・稀釈水量5～7ℓ/a でよく茎葉にかかるよ うに散布する。 ・入水は1日おいてから おこなう。
	MCP・ BAS 水和	同 上	温暖地東部の 普通期	一年生非イネ 科 ウリカワ ミズガヤツリ	MCPに準ずる 一年生非イネ科 ウリカワ： 塊茎形成前 ミズガヤツリ： 揃～7.8L	⊕ 67～ 100 g/a	全 土 壤	・前処理剤との組合せで 使用する。 ・落水茎葉処理する。

薬 剤 名	処 理 法	適 用 地 域	適 用 草 種	処 理 時 期	使 用 量	適 用 土 壤	使 用 上 の 注 意	
Ⅱ 1 5 こ し き	MCP・ BAS 粒	茎 葉 処 理	寒冷地 温暖地東部の 普通期	一年生非イネ 科 ウリカワ ミズガヤツリ ホタルイ	MCPに準ずる 一年生非イネ科 ウリカワ： 塊茎形成前 ミズガヤツリ： 揃～5.6 L ホタルイ： 揃～4 L	㊥ 300～ 400 g/a	壤土～埴土 (2 cm/ 日以下)	・前処理剤との組合せで 使用する。
Ⅱ 1 湛 水 直 播	G-315 乳	土 壤 混 和 処 理	温暖地東部 (平坦地)以 西	一年生雑草 マツバイ	ー4～ー3 (播種前)	㊥ 33～50 cc/a	壤土～埴土 (極端な漏水 田はさける)	
			寒 冷 地	植代直後				保温折衷直播
	モリネート K粒	茎 葉 兼 土 壤 処 理	温暖地西部以 西	一年生雑草 マツバイ	播種後 7～15日 イネ：1.5 L以後 ノビエ： 2.0 Lまで コナギ： 3.0 Lまで	㊥ 300～ 400 g/a	植壤土～埴土 (1.0 cm/ 日以下) 火山灰土壌 (3.0 cm/ 日以下)	・コナギ多発田では早目 に使用する。 ・低温での使用は薬害の 危険性があるので注意 する。
	B-3015 ・K粒	同 上	暖 地 播種期6月上 旬～中旬栽培 に適用	一年生雑草 マツバイ	播種後 7～15日 イネ： 1.5 L以後 ノビエ： 2.0 Lまで	㊥ 300～ 400 g/a	壤土～埴土 (1 cm/ 日以下) 火山灰土壌 (3 cm/ 日以下)	・芽干し後に使用する。
Ⅱ 1 2 乾 田 直 播	モリネート ・SM粒	同 上	温暖地東部 暖 地	一年生雑草 マツバイ	入水後 7～15日 ノビエ： 3.5 Lまで	㊥ 300～ 400 g/a	壤土～埴土 (3 cm/ 日以下)	
	BAS- 3510 水和	茎 葉 処 理	寒冷地南部～ 温暖地 温暖地東部	ミズガヤツリ	入水後 ミズガヤツリ 2～7 L 入水前 ミズガヤツリ 発生揃後	㊥ 60～ 120 g/a ㊥ 60 g/a	砂壤土～埴土 (1.5 cm/ 日以下) 全 土 壤	・DCPA剤と10日以 内の近接散布はさける。

薬 剤 名		処 理 法	適用地域	適用草種	処 理 時 期	使用量	適用土壌	使用上の注意
Ⅲ 2 つづき	BAS— 3510 液	茎 葉 処 理	温暖地西部	ミズガヤツリ	入水後 ミズガヤツリ 2～7 L	⊕ 60～80 cc/a	砂壤土～埴土 (1.5 cm/ 日以下)	・DCPA 剤と10日以内の近接散布はさける。
					入水前 ミズガヤツリ 発生前後	⊕ 60cc/a	全 土 壤	
Ⅳ 畦 畔	アシュラム 液	同 上	温暖地西部以西	全 草 種	雑草生育期	⊕ 150～ 300 cc/a	全 土 壤	・ノリ面散布はさける。 ・稲体にかからないようにする。 ・流入による薬害のおそれをなくする。 ・イネ科雑草を主対象とする。
	バラコート 起泡剤	同 上	温暖地東部	全 草 種	雑草生育期	⊕ 30cc/a	全 土 壤	・ノリ面散布はさける。 ・稲体にかからないようにする。 ・流水による薬害のおそれをなくする。 ・散布水量5～10ℓ/aとする。
V 耕 起 前	MON—39 液	同 上	寒冷地以西	一年生雑草	耕起前 30～40日	⊕ 30～ 100 cc/a	全 土 壤	・稀釈水量はできるだけ少ない量で茎葉によく付着するように散布する。 ・周辺の作物に飛散しないように注意する。
Ⅵ 休 耕 田・ 非 農 耕 地	MON—39 液	同 上	温暖地西部以西	イネ科多年生 雑草と一年生 雑草	生育初期	⊕ 50～75 cc/a	全 土 壤	・稀釈水量はできるだけ少なく茎葉に付着するように散布する。 ・周辺の作物に飛散しないように注意する。

昭和49年度畑作関係 除草剤試験成績概要

財団法人 日本植物調節剤研究協会

当協会委託の昭和49年度畑作関係除草剤の試験成績中央検討会は、昭和49年12月12日～13日の2日間、東京（東京農林年金会館）において開催された。その結果の概要をここに紹介する。

昭和49年度に供試された畑作関係除草剤は合計57薬剤で前年度の71薬剤に対して15

剤ほど減少した。また、供試薬剤についての試験結果の判定は第1表に示すとおりである。実用化にうつされた薬剤は、11作物中25薬剤であった。「実用化」および「実用化および継続検討」薬剤の使用基準を示すと第2表のとおりである。

I 供試薬剤

＜定性スクリーニング＞ (6剤)

S-28乳, S-97乳, SSH-40水和, SL-041水和, SL-55乳,
NP-31乳

＜作用特性試験＞ (29剤)

1) 大豆

S-28乳, A-820乳, NP-24水和, NP-28水和, SSH-36液,
MC-79乳, SL-041水和, SL-55乳, トリフルラリン乳

(以上 9剤)

2) 小豆

NP-24水和, SSH-36液, SL-041水和, SL-55乳

(以上 4剤)

3) 菜豆

A-820乳, SSH-36液, BAS-3510水和

(以上 3剤)

4) とうもろこし

SL-041水和, SL-55乳

(以上 2剤)

5) 落花生

A-820乳, NP-24水和

(以上 2剤)

6) 甘しよ

NP-24 水和

(以上 1 剤)

7) てんさい

(直播) S-97 乳, U-67 粒, U-67 水和

(以上 3 剤)

(移植) S-97 乳, U-67 粒, U-67 水和, NP-33 水和

(以上 4 剤)

8) 畑作一般, 非農耕地

HW-34・D

(以上 1 剤)

<適用性試験………第1表参照>

(計 48 剤)

II 対象作物・薬剤別判定結果

<第1表> 昭和49年度畑作関係除草剤判定表

区 分	実 用 化	実 ・ 継	継 続	継 ?	中 止
1) 大 豆	NK-049・P水和	SKH-01 水和 NP-24 水和	S-28 乳 B-3015・L乳 MC-79 乳 NP-23 乳 NP-28 水和 ANK-553 乳 B-3015・P粒		
2) 小 豆		ANK-553 乳	SKH-01 水和 プロメトリン・ アラクロール乳 SLD-695 水和		
3) 菜 豆	HSW-7201水和	NP-24 水和 ANK-553 乳	A-820 乳 SKH-01 水和 プロメトリン・ アラクロール乳		
4) 落 花 生		A-820 乳 NK-049・P水和 NP-24 水和 NTN-80 水和 プロメトリン・ アラクロール乳	ブラナビアン 微粒 NP-23 乳 ANK-553 乳		
5) 甘 し ょ	エナイド 水和 NP-24 水和	ブラナビアン 水和		プロメトリン粒	

区 分	実 用 化	実 ・ 継	継 続	継 ？	中 止
6)とうもろこし	クロロIPC・ アラクロール乳	アトラジン500 FW 乳			
7)ばれいしょ	プロメトリン 水和	NTN-70 水和			
8)てん菜直播		HSW-4901水和 SL-38 乳			S-97乳
9)てん菜移植		SL-38 乳	NP-24 水和 NP-38 水和 U-67 水和		S-97乳
10)こんにゃく		バラコート 液	リニュロン 粒		
11)さとうきび	アメトリン 水和	NTN-70 水和			

Ⅲ 実用化判定薬剤使用基準

<第2表> 昭和49年度畑作関係実用化除草剤使用基準

	薬 剤 名	剤型	判 定	処理方法	処理時期	使用量	適用土壌	適用地帯	使用上の注意
1) 大 豆	NK- 049・P	水和	実	土 壤	播 種 後	⊕ 50~60 g/a	全 土 壤	寒地~ 温暖地	
	SKH-01	水和	実・継	土 壤	播種後~ 出芽前	⊕ 20~30 g/a	全 土 壤	寒 地	イネ科雑草の 少ない圃場に 使用する。
	NP-24	水和	実・継	土壌~茎葉	播種後~雑草 (メヒシバ) 4葉期	⊕ 25~50 g/a	全 土 壤	寒冷地以西	イネ科雑草優 占地帯に使用 する。
2) 小 豆	ANK- 553	乳	実・継	土 壤	播 種 後	⊕ 30~40 g/a	全 土 壤	寒 地	
3) 菜 豆	HSW- 7201	水和	実	土 壤	出 芽 前	⊕ 30~40 g/a	全 土 壤	寒 地	
	NP-24	水和	実・継	茎葉 (体系)	前処理(リニュ ロン) 後 24~26日	⊕ 25~50 g/a	全 土 壤 (砂土を 除く)	寒 地	イネ科雑草優 占地帯に使用 する。

	薬 剤 名	剤型	判 定	処理方法	処理時期	使 用 量	適用土壌	適用地帯	使用上の注意
3) つづき	つづき				雑草(メヒシバ)4葉期まで				
	ANK-558	乳	実・継	土 壤	播 種 後	⊕ 30~40 g/a	全 土 壤	寒 地	
4) 落 花 生	A-820	乳	実・継	土 壤	播 種 後	成分 15~20 g/a	全 土 壤	温 暖 地	
	NK-049・P	水和	実・継	土 壤	播 種 後	⊕ 50~60 g/a	全 土 壤	温 暖 地	
	NP-24	水和	実・継	土壌～茎葉	播種後～雑草(メヒシバ)4葉期	⊕ 25~50 g/a	全 土 壤	温暖地以西	イネ科雑草優占地帯に使用する。
	NTN-80	水和	実・継	土 壤	播 種 後	成分 20~30 g/a	全 土 壤	温暖地以西	
	プロメトリン・アラクロー ル	乳	実・継	土 壤	マルチ前	⊕ 20~30 g/a	全 土 壤 (砂土・砂壤土を除く)	寒 冷 地	
			実・継	土 壤	播 種 後	⊕ 20~30 g/a	全 土 壤 (砂土・砂壤土を除く)	温暖地以西	
5) 甘 し ょ	エナイド	水和	実	土 壤	挿 苗 後	⊕ 60~80 g/a	全 土 壤	温暖地以西	跡作としてウリ類、麦類、トウモロコシ等の作付はさける。
	NP-24	水和	実	土壌～茎葉	挿苗後～雑草(メヒシバ)5葉期	⊕ 25~50 g/a	全 土 壤	温暖地以西	イネ科雑草優占地帯に使用する。

	薬 剤 名	剤型	判 定	処理方法	処理時期	使 用 量	適用土壌	適用地帯	使用上の注意
5) つづき	ブナナビアン	水和	実・継	土 壌	挿苗直後	㊥ 20~25 g/a	全 土 壌	温暖地以西	・早掘栽培を含む。 ・挿苗前の使用はさける。
6) とうもろこし	CIPC・ アラクロール	乳	実	土 壌	播 種 後	㊥ 20~25 g/a	全 土 壌	寒 地	但しシロザに劣る。
	アトラジン 500FW	乳	実・継	土壌～茎葉	播種後～雑草 2～3葉期	㊥ 10~20 g/a	全 土 壌	寒地～ 温暖地	イネ科雑草には効果がやや劣る。
7) ばれいしょ	プロメトリン	水和	実	土 壌	萌芽前5日前 後～萌芽直前	㊥ 10~20 g/a	全 土 壌	寒地～ 寒冷地	
	NTN-70	水和	実・継	土 壌	萌芽期まで	㊥ 10~14 g/a	全 土 壌 火山灰土	寒 地 寒冷地	・採種用は萌芽直前まで。 ・特に器具の洗浄をする。 ・薬量厳守
8) てん菜直播	HSW— 4901	水和	実・継	茎 葉	てん菜の本葉 2葉展開期	㊥ 20~30 g/a	全 土 壌	寒 地	・非イオン系展着剤使用 ・雑草の発生揃であること。
	SL-38	乳	実・継	土壌～茎葉	播種直後～子 葉展開期	㊥ 100~ 150 g/a	全 土 壌	寒 地	
9) てん菜移植	SL-38	乳	実・継	茎 葉	移植直後～活 着まで	㊥ 100~ 150 g/a	全 土 壌	寒 地	
10) こんにゃく	バラコート	液	実・継	茎 葉	開 葉 後	㊥ 20~30 g/a	全 土 壌	寒冷地	・2年生以上に使用する。 ・小葉への散布はさける。

	薬 剤 名	剤型	判 定	処理方法	処理時期	使 用 量	適用土壌	適用地帯	使用上の注意
11) さとうきび	アメトリン	水和	実	土 壌	植付後・ 株出し	⊕ 20~30 g/a	全 土 壌	暖 地	
	NTN-70	水和	実・継	土壌～茎葉	植付直後	⊕ 30g/a	全 土 壌	暖 地	
					雑草 2葉期	⊕ 20~30 g/a			

昭和49年度水稻・畑作関係 生育調節剤試験成績概要

財団法人 日本植物調節剤研究協会

昭和49年度水稻・畑作関係生育調節剤試験の成績検討会は、昭和49年12月10日東京（於東京農林年金会館）で例年のとおり開催された。

本年度は、水稻関係について16薬剤、畑作関係4薬剤が供試された。供試薬剤の判定結果を示すと、次表の如くである。

昭和49年度水稻・畑作関係生育調節剤審査判定及び使用基準

A. 水 稻

薬 剤 名	有効成分および含有率	試 験 目 的	判 定	実用化に対する処理法	継 続 の 内 容
1) ベンジル アデニン (液)	・ N-6-ベンジルアミノプリン 3%	・ 稚苗の活着促進、老化防止	継		・ 有望であるが実用化の検討を更に進める。
2) ボーマンP粉 L液	・ P ; SiO ₂ + 魚成分 + CaO 0.015+0.8+6.0% ・ L ; SiO ₂ + 魚成分 + CaO 0.008%+2%+ 400ppm	・ 成長促進 ・ 品質改善	継 ?		・ 水稻に対する効果は明瞭でない。 ・ 対象作物をかえて作用性の検討をする。

薬 剤 名	有効成分および含有率	試 験 目 的	判 定	実用化に対する処理法	継 続 の 内 容
3) ネマモール粒	・ DCIP 30%	・ 発根促進	継		・ 水稻に対する効果は弱い。 ①対象作物をかえる。 ②土性による効果の差。 ③地域性。 ①, ②, ③について効果の検討をする。
4) オキシペロン液	・ インドール酪酸 0.4%	・ 発根促進 ・ 健苗育成	継		・ 実用的効果は認められ 有望であるが、更に試験を継続して検討する。 (試験年次不足)
5) ユニフェロン液	・ α -トコフェロール ・ ユビキノン	・ 発芽, 発根促進 ・ 健苗育成	継 ?		・ 効果が判然としない。
6) KC-481水溶	・ ニコチン酸アミド 80%	・ 初期生育促進	継		・ 発根促進効果について 更に継続検討する。
7) N-2000水和	・ N-9-ベンジルアミノ プリン 10%	・ 活着促進効果 ・ 苗の乾物重増大 ・ ベーバーポット 苗ばらまき後の 苗屈起促進 ・ 根転び倒伏の 防止	実 および 継	・ 普通苗代では田植の2 週間前頃の茎葉に20 ppm水溶液を100 ml/m ² 噴霧処理する。 展着剤は使用しない。 ・ 稚苗では田植1週間前 に20ppm水溶液を 120ml/m ² 茎葉 に噴霧する。展着剤は 使用しない。 ・ 苗の屈起促進のため には田植の7日前に20 ppm液を200ml /m ² 散布する。	・ 適用地域の拡大, およ び本田における耐肥性 について検討。 ・ 苗屈起および倒伏防止 の効果については, 試験 初年目であるため, 地 域性, 土質, 品種など につき試験, 検討する 必要がある。 (根転び, 倒伏軽減効果 試験については, 出穂 35日前に50ppm を400ml/m ² 茎 葉散布を中心とした設 計で検討する。)
8) カルバー粉	・ CaO ₂ 53%以上	・ 湛水直播にお ける発芽, 苗 立の安定化	実 および 継	・ 粉衣量, 浸漬剤100 gに対し30gを粉衣 して播種する。 ・ 適用条件; 湛水直播	・ 省力化を前提とした剤 の改良, 機械化につい て検討。
9) RH-531水溶	・ 3-カルボキシ-1- (P-クロロフェニル) 4,6-ジメチル-2- ピリドン(Na) 91%	・ 中苗育苗の安 定化, 徒長防 止効果	実 および 継	・ 1.5葉期に50~100 ppm水溶液を苗代m ² 当り150mlの割合で 茎葉に噴霧する。	・ 中苗育苗での, 使用量, 使用時期, 播種量, に ついて継続して検討す る。

薬 剤 名	有効成分および含有率	試 験 目 的	判 定	実用化に対する処理法	継 続 の 内 容
9) つづき				展着剤を必ず使用する。 ・処理20日以後に移植する。 ・タチガレン処理を併用する。	
10) RH-103 水溶	・RH-531 (上記) 4.3% ・2,4PA 8.7%	・倒伏防止	継		・処理時期を出穂前4,5日を中心として更に継続して検討する。 ・被害の検討。
11) UMP 水溶	・5'-ウリジル酸ナトリウム	・生育促進 (収量増加)	実 および 継	・最高分けつ期にa当り60gを茎葉に散布する。 ・展着剤を加用すること。	・寒地への適用地域拡大をはかる。
12) RNA 水溶	・酵母リボ核酸	・生育促進 (収量増加)	実 および 継	・UMPに同じ	・登熟向上に対し、処理時期について検討する。
13) CMP 水溶	・5'-シチジル酸ナトリウム	・倒伏抵抗性の増加 ・登熟促進	継 ?		・効果不明瞭
14) アビオンE乳	・パラフィン 3.6%	・植え傷み防止 ・活着促進	実 および 継	(植え傷み防止) ・100~200倍液を田植直前に苗の茎葉に十分付着する程度に噴霧する。	・処理方法、適用条件について検討。 ・活着促進については更に試験検討する。
15) 植物保護被膜 剤NK		・土壌面からの蒸発制御 ・異常気象に対する植物保護	継		・更に継続検討を要する。
16) SK-23粒	・1-(α -ジメチルベンジル)-3-(P-トリル)ウレア 7%	・草丈抑制 ・収量増加	継 ?		・生育調節剤としての作用については、特に認められない。

B. 畑 作

薬 剤 名	有効成分および含有率	試 験 目 的	判 定	実用化に対する処理法	継 続 の 内 容
1) 31603-S 水和	2-ベンズイミドイル-3-ヒドロキシ-1,4-ナフトキノン 9%	(馬鈴薯, 落花生対象) - 生育促進 - 収量増加	継		
2) レグロックス 液	ジクワットジプロマイド 30%	(大豆, 小豆, 菜豆対象) - 落葉促進 - 子実乾燥効果 - 収穫作業能率の向上 - 乾燥効果による秋雑草防除	継		処理時期, 機械化作業とのむすびつきについて検討。
3) モリコフ イクス 粉	- EDTA - モリブデン - コバルト	(大豆対象) 収量増加	実 および 継	大豆種子1L当たり1.2gを種子に粉衣して播種する。	土壌条件による効果の差, 品種間による効果の差について検討。
4) エスレル 液	2-クロル-エチル-フォスフォニックアシッド 10%	(バインアップル対象) - 熟期促進 - 開花促進	実	(熟期促進効果) - 収穫期20~25日前, 300~500ppm液を1果当たり25~50cc果頂部, 冠芽に噴霧する。 (開花促進効果) 500~1000ppmにウレア2kg/10aを混用したものを1果当たり25~50cc茎葉に散布する。 500ppmにウレア2kg/10aを混用したものを1果当たり, 20~25cc, 葉芯部に注入処理する。	

植 調 協 会 だ よ り

◎ 日植調研究所発足す

昭和49年12月14日, 茨城県稲敷郡牛久
町柏田860番地, 財団法人日本植物調節剤研
究協会研究所において, 除草剤二十五周年記念,
植調十周年記念, 研究所落成記念式典を行なった。



写真 日植調研究所全影

当日は、農林省および各試験場ならびに地元関係者、当協会会員が約400名近く参会し、当協会会長戸蒔義次氏の挨拶にはじまり、農林大臣（代理福田秀夫氏）、茨城県知事（代理上牧健二氏）、牛久町長宮本進氏、都道府県農業試験場長会会長二井内清之氏、農業工業会会長吉田豊氏より祝詞をいただき、つづいて功労者表彰を行なった。功労者表彰に入るにあたり、功労者表彰選考中央審査委員長川井一之氏より選考経過報告があり、次の者が表彰された。

1. 除草剤・生育調節剤利用開発功労者

(1) 国立関係

〔除草剤の部〕

（敬称略）

- ① 研究部門 松中昭一、片岡孝義、千坂英雄、草薙得一、升尾洋一郎、柿本彰、西川広栄、中山治彦、鷺尾養、曾我義雄、宮原益次、植木邦和、中川恭二郎、小沢啓男（以上水田作）、中山兼徳、桜井輔、広川文彦、岩田岩保（以上畑作）、永井信、戸田幹彦、菅原祐幸、阿部勇（以上野菜）、七条寅之助、池田勇、奥代直己（以上果樹）、高畑滋、丸岡詮（草地）、田中静夫、杉井四郎、青野英也（以上茶園）、筋祐彦、潮田常三（以上桑園）、眞部辰夫、石井邦作、加藤善忠（以上林地）、能勢和夫（毒性）

- ② 行政部門 福田秀夫、大塚清次、鈴木照磨、吉田孝二、行本峰子、吉沢長人、鈴木博夫、

〔生育調節剤の部〕

- ① 研究部門 太田保夫、宮坂昭（以上水田作）、千葉勉、巢山太郎、久保田貞三（以上果樹）、築瀬好充（茶樹）

(2) 都道府県関係

〔除草剤の部〕

- ① 研究部門 茅野三男、楠隆、岩崎徹夫、工藤富男、高野文夫、大川晶、鈴木惣蔵、高橋周寿、齊藤孝一、渡辺正、三橋貞男、高橋昌一、藍沢喜久治、隅田喜代司、石原信一郎、河内芳治、松浦欣哉、坪存、高野久、齊藤栄賢、伊佐山悦治、山岸淳、山本実、小池房男、神谷十郎、太田孝、西郷昭三郎、片岡一男、大西功男、山根国男、高海幸夫、大森信章、江戸義治、渡辺徳太、佐竹治男、近井謙二、池上亘、武谷正明、古城齊一、城島昇、金山祐、陣野久好、伊藤延久、加藤陽二、金川修造、江畑正之（以上水田作）、小川武、和田順行、佐藤忠士、古沢典夫、竹内栄次郎、長瀬嘉迪、中島憲秋、中原浩二、内村力（以上畑作）、土肥紘、逸見俊伍、西川久夫、大和田常晴、古谷友男、佐藤光興、田中喜市、渡辺芳明、浜島直己、上松達三、西田典行、坂口春雄、沖森当、小西薫、浅井繁利、川崎重治、小川勉（以上野菜）、三上敏弘、鈴木宏、佐久間信夫、野呂徳男、森本純平、石田善一、重岡開、佐藤二郎、藤崎満（以上果樹）、滝沢寛禎（草地）、山中巖（毒性）

- ② 普及部門 伊藤正輔、小野寺正助、佐藤馨、高橋信、遠間昂、北野弘、梅田治右衛門、萩谷俊雄、船戸忠寿、引地三千夫、飯島則雄、藤曲恒、小野誠一、三木森雄、菊池年夫、定金章、石井徹治、鳥羽清、山本弥栄、高須賀計、中野正敏、高岡留吉、波津久文芳、林田多賀夫

- ③ 行政部門 亀田三千男, 奥津三郎, 和喜由雄

〔生育調節剤の部〕

- ① 研究部門 丸川慎三, 岩崎雄次郎, 阿部泰典, 北嶋秀臣, 川田計, 宮城恒夫(以上野菜) 渡辺久昭, 原田良平, 山本正幸, 安延義弘, 雨宮毅, 鹿野英士, 重里保, 石崎政彦, 山部馨, 井伊山雄平, 山口勝市, 栗山隆明, 江原忠彰, 山本末之(以上果樹)

(3) 会社関係

剤型改良開発 2,4-D(日産化学工業, 石原産業), MCP(日産化学工業, 石原産業), ロンスター(日産化学工業), ニップ(三洋貿易, 東京有機化学工業), サターンS, サターンM(クミアイ化学工業), MO(三井東圧化学), スエップM(日産化学工業), マメット(八洲化学工業), エックスゴーニ(石原産業, 日本農薬), グラモキソン(ICI, 武田薬品工業, 日本農薬), シマジン(日産化学工業, 日本化薬, 日本農薬, クミアイ化学工業), ジベレリン(武田薬品工業協和醸酵工業)

2. (財) 日本植物調節剤研究協会永年勤続功労者

吉沢長人, 杵島晴男

なお, (財)日本植物調節剤研究協会研究所建設功労者(下記関係者)に対し, 戸蒔義次会長より感謝状が贈呈された。

- ① 建設業者関係 ダイキンプラント(株), 脇田建設(株), (株)諸岡, 牛久測量設計事務所

- ② 地元協力者及び地権者関係 宮本進, 寺田一, 寺田忠夫, 山口尚, 山口正, 寺田滋美, 大貫のぶ江, 寺田光夫, 山口元夫, 柴山茂, 栗山勉, 栗山達, 河村仁一郎, 海老原五男, 大貫慎吾, 倉持源五

- ③ 会社関係 クミアイ化学工業, 日産化学工業, 石原産業, 三井東圧化学, ICI, 全国農業協同組合連合会, 日本農薬, 保土谷化学工業, 武田薬品工業, 日本チバガイギー, 三共, 日本化薬, ストウファージャパン, 八洲化学工業, デュボンファーマーイースト日本支社 日本特殊農薬製造, 住友化学工業, 昭和電工 日本曹達, 三洋貿易, ダウケミカルインターナショナル, 北興化学工業, 日本アップジョン, 塩野義製薬

- ④ (財) 日本植物調節剤研究協会関係 河田党, 戸蒔義次, 天辰克己, 吉沢長人, 田口宏
記念式典終了後, 直ちに祝賀パーティーに移り, 盛会をきわめたが14時30分閉会した。

◎ 第28回役員会開催す

昭和49年12月18日, 三井東圧化学㈱大会議室において開催し, 次の議題につき審議の上可決された。

議題

1. 役員人事の件

2. 昭和49年度予算更生の件

以上の議題につき審議可決されたが, その概要を次のべる。

1. 役員人事について

加藤駿吉理事(前石原産業)が辞任し, 代わりに飯淵宏一郎氏(石原産業)が理事に就任した。また中山治彦氏(植調研究所長)が理事に就任し, 常務理事に選任された(寄付行為第12条)

2. 昭和49年度予算更生の件

昭和49年度の受託・委託試験費の増加により, 収入・支出予算額544,441,000円を589,189,000円に更生した。したがって当初予算額より44,748,000円の増加とな

った。

また、植物調節剤利用開発25周年、当協会設立10周年、当協会研究所落成記念行事を昭和49年12月14日、茨城県稲敷郡牛久町柏田860番地当協会研究所において開催した旨を報告した。

◎ 会議開催日程のお知らせ

- ・昭和49年度林業関係除草剤・生育調節剤試験成績検討会

日時：昭和50年1月17日(金)10～16時

場所：虎の門共済会館

- ・昭和49年度落葉果樹関係除草剤・生育調節剤試験成績検討会

日時：昭和50年2月7日(金)

場所：未定

- ・昭和49年度ミカン関係除草剤・生育調節剤試験成績検討会

日時：昭和50年2月12日(水)

場所：未定

- ・昭和49年度リンゴ関係除草剤・生育調節剤試験成績検討会

日時：昭和50年2月18日(火)

場所：未定

編集後記

1975年：明るい暮明けでありたいと願う。エネルギーショックから立ち直り、ようやく物不足時代は去ったが、依然として続くインフレの進行との戦いは、まさに雑草防除との戦いに似ている。研究開発は間断なく続けられ、新しい薬剤が登録され、普及に移されているが、人間の欲望は、これには満足し得まい。今後も、除草剤の開発に、飽くなき研究は続けられるだろう。

・昭和50年度農薬・土壌残留量分析委員会

年 月 日	会 議 の 名 称	会 場
S. 50 4.22(火) 23(水)	昭和50年度農薬残留量 分析委員会 (第1回：通算36回)	日本都市センター 本館第7会議室
S. 50 5.14(水)	昭和50年度土壌残留量 分析委員会 (第1回：通算21回)	千代田区平河町 2-4-1
S. 50 6.17(木)	昭和50年度農薬残留量 分析委員会 (第2回：通算37回)	TEL 265-8211
S. 50 7.22(水)	昭和50年度土壌残留量 分析委員会 (第2回：通算22回)	
S. 50 8.19(火) 20(水)	昭和50年度農薬残留量 分析委員会 (第3回：通算38回)	
S. 50 9.17(水) 18(木)	昭和50年度土壌残留量 分析委員会 (第3回：通算23回)	
S. 50 10.21(火) 22(水)	昭和50年度農薬残留量 分析委員会 (第4回：通算39回)	
S. 50 11.19(水)	昭和50年度土壌残留量 分析委員会 (第4回：通算24回)	
S. 50 12.9(火) 10(水)	昭和50年度農薬残留量 分析委員会 (第5回：通算40回)	

財団法人 日本植物調節剤研究協会
東京都港区芝西久保桜川町26番地
電話 東京(03)502-4188(代)

昭和50年1月発行

植調第8巻第5号

¥250(送料50)

編集人 日本植物調節剤研究協会常務理事 吉沢長人
発行人 植調編集印刷事務所 広田伸七

東京都港区芝愛宕町1-3 全国農村教育協会内
発行所 植調編集印刷事務所

電話 東京(03)436-3388番



水田除草の省力化に！

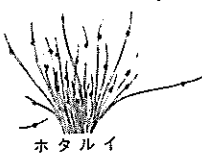
マーシエツト 粒剤 5

◎マーシエツト粒剤5は低濃度の成分で強い殺草作用があり、1回の散布でノビエなど水田一年生雑草のみならず多年生雑草のマツバイ、ミズガヤツリ、さらにホタルイなどと広い殺草巾を示します。さらに温度差または土壌の種類などによる効果の変動がほとんどなく安定した除草効果を発揮します。効果の持続期間が長く、しかも水稲に安全です。

◎マーシエツト粒剤5は「普通物」です。すから人畜にも安全で安心してお使いいただけます。他剤との近接散布も可能です。

〔種類名〕 ブタクロール除草剤

※米国モンサント社商標



— マーシエツト普及会 —
三 共 株 式 会 社
日 本 農 薬 株 式 会 社
北 興 化 学 工 業 株 式 会 社
事務局 日本モンサント株式会社

田植えがすんでひと息、

《サターン》がユトリをつくります

苗が根づいたら、そろそろサターン作戦をはじめてください

いまから4年まえ、サターン剤の登場によって、全国の稲作農家は、もともと手間のかかる除草から大きく解放されたといわれます。

安全で使用適期幅が広く強い効きめが長つづきするサターンがノビエ、マツバイ、カヤツリグサはもちろん一年生広葉雑草を一掃。雑草にとって鬼よりこわい《サターン》の名は、いまや水田除草剤の代名詞になろうとしています。



サターン S 粒剤

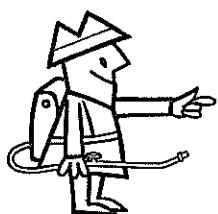


申込みは皆様の農協へ

自然に学び自然を守る

クミアイ化学

東京都千代田区大平町2-6-2日本ビル



雑草を速やかに枯らす
武田の除草剤——！



武田グラモキソン[®]

水田の畦畔、刈取後、休耕田の除草、
そさい畑の播種前、植付前、生育期の畦間、収穫後の除草
果樹園、桑園、茶園の下草除草、
牧野、非農耕地などの除草

トレファノサイド[®] 乳剤

各種のそさい類、畑作物、花卉類、茶園、桑園、森林苗畑の除草

日本列島から

ノビエ・マツバイ一掃！！

ホタルイもOK！！



水田除草剤

マメット[®] 粒剤

マメット粒剤は、水田のノビエ、マツバイなど強
害雑草に極めてすぐれた効果があります、その上、
今までの除草剤では効果のない大きくなったノビ
エにも効き、田植後おそくまくことができるので、
労力配分がうまくいき、また、ホタルイも防除で
きます。もちろん人畜や魚には大変安全です。

三笠化学工業株式会社
福岡市中央区天神4丁目9番1号

八洲化学工業株式会社
東京都中央区日本橋本町1-6(大和ビル)

お求めは農協で……